

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS

No. 174 February 2025

研究の最前線

冬期国際シンポジウム「スラブ世界における言語・ネイション・標準化：その類似と相違」開催

2024年12月18日、19日に標記の国際シンポジウムが開催されました。本シンポジウムは、センターが近年推進する「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」（長縄宣博代表）、「ウクライナ及び隣接地域研究ユニット」（青島陽子代表）の活動の一環として、米国のスラブ研究の一拠点をなすカンザス大学教養学部スラブ・ドイツ・ユーラシア研究学科、数多くの世界的な言語学者、スラブ語学者を輩出しているクロアチアの名門ザグレブ大学哲学部言語学科（クロアチア）との国際的な協同組織で実現されました。東西ヨーロッパ、北米、日本の合計12か国から、世界的に著名なシニア研究者に加え、学界で近年ますます活躍する中堅世代、そして彗星のごとく現れた優れた若手研究者が札幌に集結しました。このシンポジウムの目的は、世界各地で広く見られる言語標準化、民族アイデンティティ、国家性の複雑な相互関係、ときに政治的衝突や戦争すら生じるケースを、事例が豊富なスラブ語世界を題材とし、言語学を中心に、政治学、歴史学、社会学などのアプローチも含めて学際的に論じることでした。

言語標準化、民族アイデンティティ、国家性の問題は、とりわけヨーロッパの諸帝国が崩壊に向かい、国民国家の形成に向かう19世紀と関連付けられて論じられますが、実際にはより根が深く、個々の事例もこのよ



シンポジウム参加者と関係者

うに単純化されるのは誤解の危険をはらんでいます。したがって、本シンポジウムでは、スラブ世界の言語標準化の理論、類型とその歴史、言語とナショナリズムの相関、スラブ諸語に見られる多極性とそれに相対するイデオロギー、複数言語使用のスラブ諸国家の動態、言語的帝国主義、国家を持たない少数話者言語の標準化、多極性言語の自然発生と人工的な作

用など、多様なアプローチと論点を準備しました。

元々の共同組織のアイディアは、シンポジウム学術組織委員でもあり、世界的に著名なスラブ語学者のマーク・グリーンバーグ氏（カンザス大学）、リベラルな論客として知られるクロアチア人研究者で、比較言語学の専門家マテ・カポビッチ氏（ザグレブ大学）および筆者が2022年にカンザス大学にて意見交換を行った際に出たもので、当初はかつてのセルビア・クロアチア語や他の南スラブ諸語を題材にすることを念頭に置いていました。しかし、本シンポジウム組織にあたり、現在起きているロシアによるウクライナ侵攻に関連するウクライナ語やウクライナにおけるロシア語や戦時下の民族アイデンティティを巡る問題を含めて、スラブ語世界全体を広く、通時的、共時的に論じることを目指しました。これは2023年にセンターに新設された「ウクライナ及び隣接地域研究ユニット」の共同研究成果ともなりました。

なお、本シンポジウム組織前後でコロナ、インフルエンザ、マイコプラズマ肺炎が流行し、基調講演のランコ・マタソビッチ氏（ザグレブ大学）とマルコ・イエセンシュク氏（マリボル大学）は報告ができませんでした。事前に提出されていた力作ペーパーの代読であっても、大変白熱した議論が交わされたのが印象的でした。

無論、質の高い報告だけではなく、優れた討論者による鋭い質問、会場からの絶え間ない討論によりシンポジウムは大変充実したものになりました。参加者の一人で、スラブ言語学会の重鎮オルガ・ムラデノワ氏（カルガリー大学）からは、「私の



講演をするムスタヨキ氏



司会の松本彩花氏と質問に回答するコナタル氏



懇親会も大変充実しました
(向かって左からムーチコヴァー氏とムラデノワ氏)

長い研究人生でたくさんの研究集会に参加してきたが、ここまで学術的に満足を与える集会は本当に珍しい。これが本当のシンポジウムである」と評されました。同じく、ロシア語研究で世界的に著名なアルト・ムスタヨキ氏（ヘルシンキ大学）は、「現在の言語研究にとりわけ必要なのは学際性である。本シンポジウムでは言語学を超えた多様なアプローチを用いて分析を行う発表が多く、言語研究の正しい方向性の一つが示された。私のようなロシア語学者には必ずしも馴染みのない他のスラブ語世界の事例研究のおかげで、多くの知見を得ることができた」とのご意見を賜りました。

また、閉会の際に上述のグリーンバーグ氏は、「この二日間は想像以上に充実した研究集会だった。このような学術的にハイレベルなシンポジウムが、高い組織力をもって実現できる研究機関は世界でも非常に限られている。北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターは、スラブ言語学にとって世界的に重要な位置を占めているだけではなく、学際的なスラブ研究の実践においても、世界に誇る研究機関である」と結論付けました。世界的なスラブ語学者からの、このような高い評価は大変励みになります。なお、本研究の成果は、アムステルダム大学出版会から、グリーンバーグ、カポビッチ、野町の編集で近い将来刊行される予定です。なお、本シンポジウムの組織にあたり、報告者、討論者、司会の皆様に加え、スラブ研事務担当者、ワークステーション担当、URA、非常勤研究員、学術研究員、有志の学生ボランティアの皆さんには大変お世話になりました。また、ホテルマイステイズアスペンの沓沢様には、これまで長くスラブ研のシンポジウムを支えていただきました。この新年に退職されるということ伺い、これまでのご尽力に心から感謝をしたいと思います。最後に内輪ではありますが、助教のヤスミナ・ガヴランカペタノヴィッチ・レジッチさんは、着任一年に満たないにも関わらず、驚くべき正確、かつ迅速に、組織を進めてくださいました。ヤスミナさんの存在なくして、この冬シンポジウムの成功はありませんでした。この場をお借りしてお礼申し上げます。

当該シンポジウムのプログラムは、以下の通りです。[野町]

December 18 (Wed) Day 1

9:20-9:30 Opening Remarks

9:30-10:30 Keynote Lecture 1:

Ranko Matasović (U of Zagreb) (read by Marc Greenberg and Mate Kapović)

“A Comedy of Errors: Language Naming and Language Identity in the History of South Slavic Languages”

10:40-12:40

Panel 1: The Emergence and Development of the Pre-National in Slavic Languages

Gabriela Múcsková (Ludovít Štúr Institute of Linguistics)

“Prefixes and Ideologies – Linguistic and Political Interpretations of the Historical Character of Slovak”

Vladislav Knoll (Institute of Slavonic Studies of the CAS)

“Development of the Church Slavonic Norm”

Marc L. Greenberg (U of Kansas)

“The Emergence of Distinction: Style as a Factor in (Slavic) Language Change”

Discussant: Yukiko Maruyama (U of Tokyo)

14:10-16:10

Panel 2: East Slavic Languages in the Context of States and Conflict

Salvatore Del Gaudio (U of Salerno/Borys Grinchenko Kyiv Metropolitan U)

“Recent Trends in the Ukrainian Language and War Situation (2022–2024)”

Ewa Michna (Jagiellonian U)

“Between Emancipation and the Struggle for Survival. The Rusyn/Lemko Language in the Third Decade of the 21st Century”

Arto Mustajoki (U of Helsinki)

“The Relationship between Linguistic, Ethnic and State Identity – Russians in Ukraine”

Discussant: Ihor Datsenko (Nagoya U)

16:20-17:20 Special Presentation 1:

Mate Kapović (U of Zagreb)

“The Making of the Cultural Lexicon in Croatian and Serbian in the 19th Century”

December 19 (Thu) Day 2

9:20-10:20 Keynote Lecture 2:

Arto Mustajoki (U of Helsinki)

“On the “Easy” and “Plain” Russian”

10:30-12:30

Panel 3: The Language Labyrinth of Former Yugoslavia

Biljana Konatar (U of Kansas)

“Linguopolitical Montenegro: One Country, Two Factions, Three Points of View”

Danko Šipka (Arizona State U) [On Zoom]

“Serbian Purism: Myths and Reality”

Mate Kapović (U of Zagreb) & Dušica Božović (U of Helsinki)

“Beyond Politics: Rethinking Differences Between Croatian and Serbian”

Discussant: Robert D. Greenberg (U of Newcastle) [On Zoom]

14:00-15:00 Special Presentation 2:

Marc L. Greenberg (U of Kansas)

“Building the Encyclopedia of Slavic Languages and Linguistics”

15:10-17:10 Panel 4: South Slavic Precursors to National Languages

Olga Mladenova (U of Calgary)

“Looking Back at the Linguistic Situation of 16th-Century Balkan Slavic”

Motoki Nomachi (SRC)

“Contested Registers in Serbian in the Late 18th and Early 19th Centuries: The Case of Avram Mrazović”

Marko Jesenšek (U of Maribor/Slovenian Academy of Sciences and Arts) [On Zoom]

“The Varieties of the Slovene Language” (read by Marc Greenberg)

Discussant: Kenta Sugai (Hokkaido U)

17:30-18:30 Keynote Lecture 3:

Tomasz Kamusella (U of St Andrews) [On Zoom]

“Pluricentricity and Script”

野町研究員がマケドニア学士院最上位賞 「ブラジェ・コネスキ賞」を受賞

2024年11月27日、野町研究員は北マケドニア共和国の最高学術機関であるマケドニア学士院から「ブラジェ・コネスキ賞」を授与されました。これは2007年に始まった学士院の顕彰制度で、マケドニア及びその他のスラブを対象とした人文学研究において、特に国際的に貢献した研究者1名あるいは2名に授与される学士院で最上位の賞とされています。ブラジェ・コネスキ（1921–1993）とは、「現代マケドニア語の父」と称される著名な人文学者・詩人で、1945年の標準語制定に関わり、生涯マケドニア語研究に捧げ、当該学問分野を大きく発展させた人物です。また詩人としても国際的な名声を得ていました。これまでには、クリスティナ・クレイマー（トロント大学、2007年）、ホレイス・ラント（ハーバード大学、2010年）、ビクター・フリードマン（シカゴ大学、2017年）など、マケドニア学に大きな足跡を残している研究者が受賞しています。

野町氏の受賞理由は「マケドニア語研究とその発展への著しい貢献による」と発表されていますが、具体的には、マケドニア、ロシア、セルビアなど様々な文書館や個人所有のマケドニア語研究に関わる手稿や研究者同士の書簡などの分析を通じて、マケドニア語標準語史およびマケドニア学史に研究に新たな局面を開いたことが評価されたとのことです。

野町研究員は、これまでも国内はもとより国際的にも顕彰を受けてきましたが、今回の受賞は、氏が日本人としてまたアジアの代表としてセンターのスラブ言語学の研究を世界最高水準に高めてきたこと示すもう一つの証しとなります。今後ますますの活躍が大いに期待されます。

[長縄・野町]



ディプロマ



メダル

ハーヴァード大学での生存戦略研究セミナー Eurasia from the East 2024 の開催

11月に岩下研究員、ウルフ研究員、長縄研究員がハーヴァード大学のロシア・ユーラシア研究拠点であるデーヴィスセンターを訪れ、生存戦略研究セミナー Eurasia from the East 2024 を共催し、その数日後、ボストンで開催されたスラブ・東ヨーロッパ・ユーラシア研究協会（ASEEES）の年次集会でパネルを組織しました。ハーヴァードのセミナーには約30人の研究者が出席し、デーヴィスセンターの会議室は満員でした。司会は同大学ウクライナ研究所所長のセルヒー・プロヒー教授に務めていただき、昨年来の旧交を温めることができました。

セミナーは、中国で最近ヒットし、興行収入が1億ドルを超えたアクション映画に関するウルフ研究員の分析から始まりました。この映画は、ロシアで暗躍する中国人ギャングの犯罪を解決するために中国とロシアの治安機関が友好的に協力する様を描くものです。これは、1993年春に中国の犯罪集団がシベリア横断鉄道を2度占拠し、乗客を略奪、暴行、強姦した実話に基づいているそうです。この映画「モスクワ・ミッション」では、現在のロシアと中国の「無限のパートナーシップ」を支持する肯定的なプロパガンダを平均的な中国国民の間に作り出すために、映画製作という香港のソフトパワーが利用されていることを見て取れます。同時に、共産党の指導体制を放棄した国に何が起るのかについて混沌、貧困、暴力のイメージも示しています。

つづいて岩下研究員は、ウクライナ戦争の現段階に対する東アジアの反応を概観しました。中国政府はロシアの戦争継続への支持を曖昧にし隠していますが、中国人の専門家は圧倒的に否定的で、戦争でロシア帝国主義が再び現れたと見ています。また、ロシアがウクライナの制圧に手こずっていることから、軍事的にロシアには将来がないとも感じています。韓国は対ロ制裁に微温的な態度を続けてきましたが、北朝鮮軍が戦闘経験を積むためにウクライナ・ロシア戦線に到着するに及んで、ロシアに対する態度を硬化させています。最後に、現在の世界秩序を破壊しようとするロシア（および中国）の願望は日本にとって最大の危険であるので、それがウクライナへの全面支援につながっています。岩下研究員は、ロシアが日本に対するレトリックをここ数ヶ月和らげ、東京からより穏健な姿勢を引き出すか、少なくとも戦争で凍結された対話のチャンネルを再開することを望んでいるようだと指摘しました。

最後は長縄研究員が、ロシアと中東の絡まり合いから1870年代からこんにちまでを長い20世紀として捉える見方を提案しました（『思想』2024年4月号で展開したものの一部です）。交通・通信技術の著しい発達は、帝国主義が駆動するグローバリズムを生み出しました。しかし、同時並行で増殖したナショナリズムは、帝国を破壊し、その後継者として新しい国際政治の単位である国民国家もつくりましたが、今やその双子であるグローバリズムを解体し始めています。折しも、トランプ氏が米国大統領に返り咲き、冷戦後のアメリカ帝国の終焉が痛感されるタイミングでのセミナーでしたので、グローバリゼーションの定義や通時的な評価、そして今後の中東におけるロシアの位置づけなどについて質問を受けました。

なお、会議の様子は Apple Podcasts でも聴くことができます。

<https://podcasts.apple.com/us/podcast/eurasia-from-the-east-2024/id1110853238?i=1000677816139>

ASEEES で長縄研究員は、「自由のための扉、地政学のための砦：ロシア帝国の港湾都市」と題するパネルを組織し、アストラハンのムスリム社会について発表しました。岩下研究員とウルフ研究員は、北海道大学の戦略的パートナーであるメルボルン大学と共催の「亡命の影響を内在化する：移住体験、解放、アイデンティティの変化」と題するパネルで報告しました。また、服部研究員と田畑元研究員も「恒久的制裁を受けるロシア経済の統計分析」と題するパネルを組織しました。[ウルフ・長縄]

セルギー・コルスンスキー駐日ウクライナ特命全権大使による 講演会を開催

2024年10月22日、セルギー・コルスンスキー駐日ウクライナ特命全権大使をお迎えし、スラブ・ユーラシア研究センター大会議室にて、「未来のユーラシアのための協力：ウクライナと日本の対話 (Cooperation for Future Eurasia: Dialogue between Ukraine and Japan)」をテーマに講演会を開催しました。本講演会は、2024年度スラブ・ユーラシア研究センター外国人招へい教員で「ウクライナ及び隣接地域研究ユニット」国際アドバイザー・ボードにも参加いただいている Olena Nikolayenko 氏の発案で企画が始まり、北海道大学国際部国際連携課の全面的な支援のもとで実現しました。登録締め切りのはるか前に定員は埋まり、当日は本学教職員および新渡戸カレッジ生等の学生約60名が講演会に訪れました。

本講演会は、大使からの希望により、スラブ・ユーラシア研究センター岩下明裕教授との対談形式で開催されました。岩下教授による大使の紹介の後、大使からは、日本からの支援への感謝、ウクライナの平和への希求が述べられ、それに続いて、ウクライナの現状、EU内部の情勢、「グローバル・サウス」との関係、アジアの情勢などについてお話を伺いました。続く質疑応答では、デイトン合意型の和平の可能性や南米との関係性といった参加者からの質問に大使が回答しました。大使の真摯なご意見には、同日のセミナーのために会場にいらしゃった国際政治学者のルーベン・アジジャン先生も感銘を受けておられました。

講演会前には資金清博総長および高橋彩理事・副学長との懇談が行われました。懇談では北海道大学の強みである農業や技術分野での学術交流に関する話題に花が咲きました。時間を大きく超過して、意見交換が続きました。[青島]



コルスンスキー大使と岩下教授の対談

「国際スラビスト委員会スラブ・マイクロ文章語研究部会定例会議」 開催される

2024年12月1日に、標記の研究集会在、センターの「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」との共催でオンラインにて開催されました。本部会は国際スラビスト会議の活動の一部をなすもので、2008年にエストニアの言語学者で、スラブ世界の小言語研究に取り組む Aleksandr Duličenko 氏が立ち上げたもので、現在は Duličenko 氏も含めて18人の少数話者言語の研究者が委員を務めています。研究対象となるのは、ルシン語、カシュブ語、モリーゼ・スラブ語などといったスラブ世界の小規模言語全体ですが、社会言語学、言語接触研究、認知言語学など、様々な分野の研究者が部会委員を務めています。詳細は部会サイト (<https://sites.google.com/view/slavic-micro-languages/home?authuser=0>) をご覧ください。

これまで部会の研究活動は不定期ながら集中的に行われてきました。しかし Duličenko 氏が長期間にわたり病気であるため、筆者と現部会委員たちとの意見交換を踏まえて、まず部会事務局を改めて立ち上げ、規則類なども整備し、事実上の活動再開を行いました。ホームページの立ち上げは、事務担当の亀田さんにご尽力いただきました。

今回の集まりは、第1回定例会議とされ、社会言語学と言語接触を扱う4つのパネルセッションで合計11件の報告が行われ、専門家として委員以外の研究報告も2件行われました。プログラムは以下の通りです。

8:30–9:30 Panel 1. Language Protection and Revitalization

Katharina Tyran: *Burgenland Croatian in the Public Space – Grassroot Approaches to Expanding the Visibility of a Minority Language in Austria*

Helena Duć-Fajfer: *Ревіталізація проти асиміляції – можливе і неможливе*

9:30–11:00 Panel 2. Language Status and Standardization

Artur Czesak: *Состояние и статус силезского языка в Польше*

Tadeusz Lewaszkiewicz: *Rola leksykografii w kodyfikacji języka kaszubskiego*

Martin Henzelmann: *Современная проблема стандартизации языка буневцев в Сербии*

11:00–12:30 Panel 3. SML in Non-Slavic Areas

Rossanna Benacchio: *Семельфактивний суффикс -ни/ні- в словенських діалектах Фриулі*

Walter Breu: *Аналитический каузатив молізско-славянського микроязыка как результат влияния итальянского*

Motoki Nomachi: *Existential Clauses in Kashubian: A Historical and Typological Analysis*

13:30–15:00 Panel 4. Topics from the Rusyn Language and the Slavic-Slavic Language Contact

Aleksandar Mudri: *The DOG in the Vojvodinian Ruthenian Linguistic Image of the World*

Kaname Okano: *Статус союза да и да-конструкции в процессе стандартизации русинского литературного микроязыка Сербии и Хорватии*

Kenta Sugai: *Does the Bulgarian Language of Parcani Have an Innovative Possessive Construction? An Analysis of the Contact-Induced Change*

なお、スラブ・マイクロ文章語研究部会の活動再開にあたり、ベラルーシの著名なスラブ語学者 Henadz' Apanasavič Cyxun 氏にご協力をお願いしました。Cyxun 氏はバルカン言語研究の専門家ですが、スラブ言語学全体に広く通じ、1980-90 年代の「西ポレシエ語」などの少数話者言語などについても多くの論考をお持ちです。2024 年 6 月、Cyxun 氏に部会の活動をご連絡した時に、以下のようなお返事をいただきました（原文はロシア語）。

親愛なる野町素己さん

スラブの小言語の研究において、私の能力を高く評価してくださったこと、そして部会委員として推薦してくださったこと大変感銘を受けました。可能な限り（年齢と健康のことです）、私は部会活動に協力するつもりです。ただ、国際情勢が大変残念な状況で、近い未来に部会の実りある活動の妨げになると思います…。しかしながら、国際スラビスト会議が行われるまでの間でも、特にあなたの個人的な尽力により、部会の活動は大変うまくいく可能性もあると私は思っています。成功をお祈りいたします。

ゲンナジイ・ツィフン

大家の Cyxun 氏によるサポートは大変心強く思い、感謝の気持ちで一杯でした。今年の部会定例会議の日程が決まったため、10 月中頃に Cyxun 先生にご報告の準備をお願いする案内を出しましたが、お返事はありませんでした。その後、大変残念ながら、先生は 10 月 18 日にご逝去されたことを知りました。部会としては大変な痛手であり、個人的に長年存じ上げていた身としても、非常に悲しく思います。Cyxun 先生のご冥福をお祈りいたします。

[野町]

EES/CGR Special Seminar “Migration in Wartime”@ 長崎大学

2024 年 12 月 26 日に長崎大学で EES/CGR Special Seminar “Migration in Wartime” が開催されました。最初に岩下明裕氏より開会の挨拶 “Migration as a Global Risk” がありました。Vladimir Rouvinski 氏の Special Lecture “Driven by Uncertainty: Contemporary Russian Migration to Latin America” は、2022 年 2 月以降にロシアを離れてラテンアメリカに移住したロシア人移民について、統計の分析、アンケート調査やインタビューを行った結果を考察したものです。

コメンテーターは村上勇介氏（京都大学）、Abdurrahman Gülbeyaz 氏（長崎大学）、中地美枝氏（北星学園大学）が務められ、フロアからも活発なコメントがなされました。現地住民とのコネクションや旧来の移民との差異、世代差、ビザのシステムと出産を伴う移住、帰国の要因、地域組織の存在などについて、広範な数多くの質問が出されました。

セミナーには EES の研究分担者も参加し、閉会後も場所を移してロシア人移民について活発な議論が続きました。

右下の写真は、セミナーの前に長崎大学周辺の第二次世界大戦関連の史跡を見学した様子です。長崎は対外交渉・交流史のみならず、戦争のローカルな記憶という点でも独自の歴史をもっているため、大変興味深く、勉強になりました。

27日にはEESの拠点構成員と研究分担者によって編著の出版に向けた打ち合わせも進められました。[松本(祐)]



セミナーの様子



史跡ツアーの様子

「東ユーラシア研究」プロジェクト (EES-SRC)

EESプロジェクトでは、上記のセミナーのほか数多くのセミナーを主催し、参加しています。

2024年12月5日～12月7日に、EES 東北大拠点の主催で国際シンポジウム“Crisis of Well-being and Well-being in Crisis across Borders” (GASP-EES International Symposium) が開かれました。この国際シンポジウムは、紛争・災害・気候変動・人口問題などの現代的課題を理解し、その解決に取り組むための視座をえるための考察を、ローカルおよびグローバルなウェルビーイングに焦点を当て、人類学や歴史学などを含む地域研究を中心にして行うことを目的としたものです。初日は招待者限定の東日本大震災の遺構見学、二日目は若手研究者セミナー、三日目は全体討論を含む5つのセッションが行われました。本拠点より、研究分担者の井上岳彦氏が第4セッション Russian invasion of Ukraine and the Wellbeing of Indigenous peoples に Discussant として登壇しました。2025年1月25日～26日には、北大拠点にて、東ユーラシア研究プロジェクトの2024年度全体集会・若手研究者集会が開かれます。

「東ユーラシア研究」プロジェクト (EES-SRC) の YouTube チャンネルでは、前号のセンターニュースでの報告以降、3つの動画を新たに公開しています。

2024年10月12日には、JIBSN セミナー 2024 与那国「境界地域のなかに光をみる」が開催されました。セッション1「砦とゲートウェイ：境界地域の課題」とセッション2「地域のグローバルリスクを考える」の動画が公開されています。

https://youtu.be/tP6csHkQpvM?si=q7Df__snP5D7Boc_

<https://youtu.be/PNbmYFmnmWw?si=KN6MeI5923wDKmsg>

2024年10月17日には、SRCW/CGR 実社会のための共創セミナー「ポスト冷戦後における核兵器のグローバルリスクとは？」が開催されました。報告者は西田充氏 (長崎大学 グローバルリスク研究センター／多文化社会学



部)、コメンテーターは鈴木一人氏（東京大学公共政策大学院）、司会は岩下明裕氏（SRC / 長崎大学 グローバルリスク研究センター）でした。

<https://youtu.be/KtSMkfJyhuU?si=DWNdBhI6TjXwtJJw>



[松本（祐）]

メルボルン大学訪問

12月3日から8日までメルボルン大学との学術交流のためにオーストラリア・メルボルンに滞在しました。メルボルン大学より「国際的パートナーとの共同深化」のためのファンドに基づき、共著論文執筆に向けた研究打ち合わせのための出張でした。メルボルン大学は北海道大学にとっても重要な戦略的パートナーです。すでに昨年度、2024年1月12日にスラブ・ユーラシア研究センターにて「ユーラシアの移民：過去・現在・未来」と題されるワークショップが開かれましたが（メルボルン大学から6名、北海道大学から5名が参加）、このワークショップの際に、メルボルン大学「ポスト・ソヴィエト空間研究」グループとの学術交流の深化・発展の一環として今回の訪問が企画されました。

滞在期間中は、共同研究パートナーである Julie Fedor 氏と研究会合を進める他、次年度の学術交流に関する打ち合わせを Mark Edele 氏、Julie Fedor 氏、Iryna Skubii 氏と行いました。また、ヴィクトリア州ウクライナ人協会アーカイヴのアーキヴィストを務める Yana Ostapenko 氏とも、ウクライナ移民関連の資料のアーカイヴ化の問題について、お話を伺うことができました。現在、センターでは、ウクライナ研究グループ、移民研究グループが活動を続けている他、今後、少数民族や抑圧された人々の声をどうアーカイヴ化するかに関するプロジェクト立ち上げを企画していることもあり、次年度の学術交流のテーマでもウクライナ移民に関わるアーカイヴの問題は重要なテーマとなりそうです。

最終日7日の夜には、スターリン強制移住の生存者である Nina Smenda さんのお宅に、メルボルンを拠点とするポーランド・コミュニティの方々とともにお邪魔する機会に恵まれました。ニーナさんはスターリン体制下でのシベリア・カザフスタンへの強制移住ののち、イラン・アフリカを経由する非常に過酷な道程でオーストラリアに到着されました。現在、88歳というご高齢であるにも関わらず、人数分のフルコースの食事をテキパキとご用意され、闊達にお話をされる姿には大変な感銘を受けました。同席したポーランド・コミュニティの方々のほとんどがクレスィ（戦間期ポーランド東部国境地帯で旧ポーランド＝リトアニア共和国領東部にあたる）ご出身で、出自のお話を大変興味深く聞かせていただきました。



滞在中には、そのほか、ニューサウスウェールズ大学 Alison Bash-

キッシュを切るニーナさん、バーシャさん、ジュリーさん

ford 氏の手相を巡る医療史という非常にユニークなセミナーに出席したり、メルボルン大学歴史哲学部の忘年会に顔を出させてもらったり、さらにはヒールズヴィル・サンクチュアリに連れて行ってもらってコアラ・カンガルー・タスマニアデビルと面談したりと、非常に充実した訪問となりました。[青島]

中央アジア国際研究所（ウズベキスタン）代表団の来訪

2024年12月9日に、ウズベキスタンの中央アジア国際研究所（International Institute for Central Asia [IICA]）の代表団がセンターを訪れました。この研究所（シンクタンク）は2021年にミルジヨエフ大統領のイニシアティブで新設され、中央アジア地域の諸問題を、国際関係を中心に研究しています。当初は3人の訪問予定だったのが、1人が訪日を取りやめたため、シェルゾド・ファイズィエフ副所長とノズィマボヌ・マンズロヴァ研究員という2人の訪問となりましたが、日本と中央アジア諸国の関係、中央アジア域内協力、中央アジアをめぐる大国間関係などについて、密度の濃い意見交換ができました。センターでは、今後も中央アジア・コーカサス諸国のシンクタンクとの協力関係をさらに強めたいと考えています。なお、代表団の訪日の記録は下記リンク先で読むことができます。[宇山]

https://uza.uz/ru/posts/mica-nalazhivaet-partnerstvo-s-yaponskimi-mozgovymi-centrami_673144

共同利用・共同研究拠点公募研究の国際化の一步を踏み出して

2024年度から「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」のうち、「プロジェクト型」の一部は国際公募になりました。国外からの応募のうち、今回は2件採択されましたが、そのうちの1件は著名なバルカン言語学者の Marjan Markovikj 氏（聖キリル・メトディ名称スコピエ大学 / マケドニア学士院）が代表を務める研究グループのプロジェクトで、「マケドニア標準語および方言における迂言法の形式的・機能的分析（バルカン言語的文脈において）」と題されているものです。バルカン半島の諸言語では、長期にわたる多言語による言語接触の結果、言語発生に基づかない構造的類似性が所与の言語に生じていることは広く知られている事実ですが、そのうちのひとつとして、英語でも見られるような have 動詞や be 動詞を用いた分析的表現が発達しました。しかし方言的差異はこれまで分析されておらず、また標準語においても使われ方が変化していることは十分に知られていませんでしたが、本共同研究により、方言内における通時的变化が認められ、標準語においても Horace Lunt や Blaže Koneski らといった 1950 年代の記述では説明できない変化が起きていることが明らかにされました。



講演会後に続く質疑応答の様子
(向かって左が Jankuloski 氏、右がスラブ・ユーラシア学研究室修士課程の橋爪真さん)

今回の共同研究では、同研究グループの Victor Friedman 氏（シカゴ大学）、Marjan Markovikj 氏らのフィールドワークに基づく研究や理論的研究を踏まえつつ、事前に研究グループ内での議論を行い、2024年10月30日に本研究テーマで最新の成果を出している Davor Jankuloski 氏（マケドニア学士院地域言語研究センター）がセンターで講演されました。この講演に先立ち、Jankuloski 氏は国際プロジェクト『全スラブ方言地図』に基づく、マケドニア方言研究の最新成果についても話されました。また、11月1日には、東京大学駒場キャンパスにて、方言語彙から見るマケドニア文化についての講演が行われました。講演会組織に関し、山崎信一氏（東京大学）のご助力をいただきました。深くお礼を申し上げます。

Jankuloski 氏によると、今回の研究成果は主要な欧米の研究誌に投稿されるとのことです。また、Jankuloski 氏滞在中に、マケドニア学士院との連携によるデジタル・ヒューマニティーズ関連の今後の共同研究への発展に関する意見交換も行われました。[野町]

2024 年度公開講座「シルクロード：交差する時間・空間・ディシプリン」開催される

センターでは 1986 年以降、札幌市教育委員会や地域研究コンソーシアムの後援を得ながら、札幌地域の社会人を対象にした公開講座を毎年 1 回開催してきました。新型コロナウイルス感染症の流行により中止となった 2020 年度以降は、オンラインあるいはハイブリッド形式での開催となり、地域を問わずアクセスが可能な講座となっています。今年度の公開講座はシルクロードを主題とするものでした。

正倉院展が毎年変わることもない賑わいを見せているように、シルクロードの文物はいまなお、日本において多くの人々を魅了しています。一方でシルクロードへの関心は、日本にも文化にも留まらず、中国が打ち出した一帯一路、いわゆる国際的な経済構想もまた絲綢之路/シルクロードの名を冠しています。さらに、ユーラシアの向こう側でも現在、英国博物館においてシルクロード特別展が開催されています。その背景の 1 つとして、オックスフォード大学で教鞭を取るピーター・フランコパン氏の手になる『シルクロード全史：文明と欲望の十字路』（河出書房新社、2020 年。原作は 2015 年刊行。）が挙げられます。この本は世界 25 カ国で刊行され、100 万部を売るベストセラーとなりました。時間や空間、学問分野/ディシプリンを問わず、今もなお——むしろ今まさに——シルクロードには多大な関心が寄せられているのです。

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 令和6年度公開講座

シルクロード

——交差する時間・空間・ディシプリン

講演スケジュール / 講師

- 第1回 10月10日(金) オンライン講演**
中国のシルクロード開拓の考古学と歴史-東-西の視点から見た 西野 雅子 (早稲田大学)
- 第2回 10月25日(金) ハイブリッド講演**
ドゥンガンの死と道 中国のシルクロードの歴史と文化 西野 雅子 (早稲田大学)
- 第3回 10月29日(火) ハイブリッド講演**
シルクロードのシルクロード 中国のシルクロードの歴史と文化 西野 雅子 (早稲田大学)
- 第4回 11月1日(日) オンライン講演**
シルクロードのシルクロード 中国のシルクロードの歴史と文化 西野 雅子 (早稲田大学)
- 第5回 11月8日(金) オンライン講演**
シルクロードのシルクロード 中国のシルクロードの歴史と文化 西野 雅子 (早稲田大学)
- 第6回 11月11日(日) オンライン講演**
シルクロードのシルクロード 中国のシルクロードの歴史と文化 西野 雅子 (早稲田大学)

会場 (ハイブリッド開催)
ウェビナー/北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 4階大会議室(403)

参加方法 (参加費無料/対講参加の方は費料不要)

このほか、<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/open/>でご確認ください。

主催
北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター (SRC)
協賛
地域研究コンソーシアム

お問い合わせ
北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター (事務局)
電話) 011-706-2388 (通話-平日のみ18時まで)
FAX) 011-706-4952 E-MAIL) jimu@slav.hokudai.ac.jp

受講者募集
受講期間
10月21日(月)
11月11日(月)
月曜日・金曜日
18:00~20:00

本講座はこうした状況を踏まえながらも、スラブ・ユーラシア研究センターだからこそ敷くことのできるシルクロードを意識しました。我々が旅したのは、「日本から、スラブ・ユーラシア地域にかけての」シルクロードでした。

我々の旅の始まりである、第1講演の西村陽子（東洋大学）「20世紀初頭のシルクロード探検隊の考古調査：独・露・英各国調査隊が残した画像記録と現況」においては、シルクロードの景観として多くの人がイメージするであろう、トゥルフアン盆地の世界遺産である高昌故城の近辺が舞台となりました。西村氏は、20世紀初頭において独露英各国のシルクロード探検隊が残した古写真・古地図を手掛かりに、現代の技術を駆使して写真の撮られた位置を特定し、すでに失われたと考えられてきた数々の遺跡の同定に成功してきたのです。

第2講演の海野典子（大阪大学）「ダウンガン人の来た道：中央アジアに移住した中国ムスリムの末裔たち」で、我々はシルクロードの裏路地に誘い込まれます。ダウンガン人、おそらくは日本人の多くがその詳細について知るところのないこの人々は、19世紀後半から20世紀中葉にかけて、中国西北地域からロシア帝国（のちのソ連）領に移住した回民、つまり中国系ムスリムです。海野氏はダウンガン人の歴史・文化・生活を自身のフィールドワークに基づいて紐解いていきます。講演の最後では、一帯一路政策のなかで、ダウンガン人がその懸け橋として期待されていることも語られました。

ダウンガン人の居住地の1つであるクルグズスタンのイシク湖周辺は、その時代から遡ること数世紀、世界的なパンデミックの震源地でもありました。14世紀にヨーロッパ人口の3割を消失させたと言われる黒死病です。第3講演の諫早庸一（SRC）「21世紀のシルクロード論争：黒死病はどこから来たのか」は、まさにこの黒死病の来た道を辿るものでした。日本では20世紀後半にシルクロードとそれがつないだ空間の歴史理解をめぐる「シルクロード論争」が巻き起こりました。黒死病の起源とその経路についても、現在、歴史学・考古学・古気候学・古遺伝学といった様々な学問分野が関与する熱い議論が展開されており、それは「21世紀のシルクロード論争」とも表現しうるものなのです。

第4講演の中村和之（函館大学）「北東アジアのシルクロード：蝦夷錦の来た道」から、我々のシルクロードは日本とも連結していきます。特にこの講演は公開講座の開催地である北海道をシルクロードとつなぐものでした。講演の主題である蝦夷錦とは中国産の絹織物であり、それがアムール川下流域に居住する人々との交易を通じてアイヌにもたらされます。サハリン島北西岸で採取された蝦夷錦の下地に対する放射性炭素年代測定の結果は、1411年という可能性を示しました。この年代はまさに明朝がアムール川下流域に進出して拠点を立てた時期にあたります。蝦夷錦の断片は、この時代に朝貢交易を媒介として中国産の絹織物がアイヌの地にもたらされていたことを我々に伝えてくれるのです。

第5講演の宮崎千穂（静岡文化芸術大学）「民族興亡の歴史と旅：井上靖『古代ピャンジケント』（1966）を読み解く」はある意味で、我々をシルクロードの原点に立ち返らせるものでした。シルクロード・ブームに火をつけた1946年、初めての正倉院展は、その後に国民的作家となった井上靖（1907～1991年）にも大きな刺激を与えました。彼はその後、1965年にソ連領中央アジアを旅し、帰国後に短編小説『古代ピャンジケント』を発表します。この小説のモチーフである血と市場と宝石とを反映する中央アジア、雑多な民族が入り混じるこの舞台を通して井上は、戦後日本、特にその50年代から60年代にかけての変容を見ているのです。

最終第6講演の小野亮介（東京外国語大学）「アジア主義的連帯に至る道：トルコ独立戦

争期における第0代大使内田定槌とその周辺」において我々は、空間だけでなく時間の意味でも「戻ってきます」。キーワードは日土国交樹立100周年、2024年がその年にあたっているのです。ただしこの講演の主役は、それ以前に存在感を放った「第0代大使」と表現する内田定槌（1865～1942年）です。30年以上にわたって外交官

として勤務した彼は、大河ドラマ「いだてん」に出てきたように、ストックホルム公使としての活動がより有名ではあるものの、その一方で彼は高等弁務官としてイスタンブールに駐在し（1921年4月～1923年7月）、国交樹立前の対トルコ外交に中心的な役割を果たしてもいるのです。

副題の通り、時間と空間と学問分野/ディシプリンとを様々な交差させて織り上げた絹の道、この道を実地・オンラインあわせて平均すれば毎回60名近い方々がともに歩いてくださいました。この講座に協力して下さった全ての方々に、この場を借りてあつく御礼申し上げます。当講座は書籍化も計画されています。こちらも御期待いただけますと幸いです。[諫早]



会場の様子

アカデミックライティング講習の開催

本講習は修士課程・博士課程を主な対象に英語での論文の書き方の基礎を学ぶことを目的として、2024年12月11日、12日の2日間に渡って開催されました。担当講師はOxford大学主任研究員のTroy Sternberg博士です。Troy氏と当センター学振特別研究員の廣田千恵子はJSPSの英国(UKRI)との国際共同研究プログラムPPIA(The Post-Pandemic Societies in Inner Asia project)のメンバーとして、これまでもモンゴル、クルグズ、日本(千葉・神戸)で若手研究者支援のためのライティング講習を運営してきました。こうした流れの中で、この度Troy氏に来道いただき、当センターでの講習会開催が実現しました。

講習会には修士課程5名、博士課程2名、研究員3名が参加しました。院生たちは講習前から自身の研究関心等について150 wordsでまとめ、それをTroy氏が添削してアドバイスをいただきました。

講習1日目には、まずOxford大学で用いられている論文執筆の手引きをもとにTroy氏が学術論文の基礎的な構造を解説し、そのうえで実際に査読誌に投稿された要旨をもとに、そこに書かれている研究目的、研究手法、研究意義、社会との関連性を読み解く練習をいただきました。後半はベクトウルスノフ研究員に論



初日のペアワークの様子

文を書く際に感じた困難、日本語論文と英語論文の違いについて、ご自身の経験に基づいてご発表いただきました。

講習 2 日目は、スピーキング及びプレゼンテーションの訓練として、各自 5 分程度で自身の研究内容を発表しました。後半はリジェクトされた論文をもとに、なぜそれがリジェクトされたのか、その問題点について批判的検討をおこないました。2 日間という短い期間ではありましたが、充実した時間となりました。

本講習を開催するにあたってご快諾いただきましたセンター長、専任の先生方、ご協力いただきましたベクトルスノフ研究員、藤本研究員と院生の皆さんに心から御礼申し上げます。[廣田]

2025 年度外国人招へい教員（外国人研究員）の決定

2025 年度の外国人招へい教員（外国人研究員）は、以下 7 名の方が決まりました（姓のアルファベット順）。北大での職名は特任教授または特任准教授となります。今回の公募には 76 名の応募がありましたが、これはコロナ前の水準を回復しさらには凌ぐほどで、研究者のテーマ、所属、年代などもこれまでになく多様なものとなりました。採用者はこうした厳しくも豊かな競争から厳選された方々で、夏の国際シンポジウムにも数多く登壇予定ですので、どうぞご期待ください。[安達]

ベールジニャ - チェレンコヴァ, ウナ・アレクサンドラ (Bērziņa-Čerenkova, Una Aleksandra)

本務機関・現職：リガ・ストラディンシュ大学・助教（ラトビア）

研究テーマ：新しいポスト・ネオリベラル秩序を共有するロシアと中国：日本とバルトに対する安全保障インプリケーションの比較

滞在期間：2025 年 5 月 1 日～6 月 30 日

担当教員：岩下

キャシデイ, ジュリー・アン (Cassiday, Julie Anne)

本務機関・現職：ウィリアムズ大学ドイツ・ロシア学科・教授（アメリカ）

研究テーマ：ポストソ連のポップカルチャーにおけるボーイズラブ・ミーツ・ガールパワー

滞在期間：2025 年 8 月 4 日～10 月 17 日

担当教員：安達

ディ・コズモ, ニコラ (Di Cosmo, Nicola)

本務機関・現職：プリンストン高等研究所・教授（アメリカ）

研究テーマ：前近代中央ユーラシアの遊牧民における気候の影響と国家形成

滞在期間：2025 年 5 月 15 日～7 月 15 日

担当教員：諫早

ハイダルパシッチ, エディン (Hajdarasic, Edin)

本務機関・現職：ロヨラ大学シカゴ校歴史学部・准教授（アメリカ）

研究テーマ：20 世紀におけるバルカン半島のムスリム、改宗、社会変容
滞在期間：2025 年 5 月 31 日～7 月 30 日
担当教員：ヤスミナ・野町

ハースト, サミュエル・ジョン (Hirst, Samuel John)
本務機関・現職：ビルケント大学国際関係学部・助教 (トルコ)
研究テーマ：ソ連と中東の政治経済
滞在期間：2025 年 5 月 15 日～9 月 15 日
担当教員：長縄

イスマイルベコヴァ, アクサナ (Ismailbekova, Aksana)
本務機関・現職：ライプニッツ現代東洋研究センター・上級研究員 (ドイツ)
研究テーマ：ウクライナ侵攻期における中央アジアとロシアの間の新しい人の移動の形
滞在期間：2025 年 7 月 2 日～2025 年 9 月 1 日
担当教員：宇山

パルコ, オレーナ (Palko, Olena)
本務機関・現職：バーゼル大学・助教 (スイス)
研究テーマ：赤いソバレルの塔：戦間期ウクライナにおけるソヴィエト・マイノリティ実験
滞在期間：2025 年 6 月 16 日～8 月 18 日
担当教員：青島

専任研究員セミナー

専任研究員セミナーが以下のように開催されました。

2024 年 10 月 20 日 仙石学

報告：ヴィシエグラード諸国における 2024 年欧州議会選挙

コメンテータ：臼井陽一郎 (新潟国際情報大学)

このペーパーは『国際問題』に寄稿されたもので、東欧のヴィシエグラード 4 カ国 (チェコ、ハンガリー、ポーランド、スロヴァキア) を題材として、2024 年 6 月に実施された欧州議会選挙を軸にこの諸国の選挙前後の政治動向を概観することを目的としています。一般には今回の欧州議会選挙では右派・極右系政党の台頭と穏健勢力の後退が強調されますが、ヴィシエグラード諸国の場合 EU に対する支持が比較的高いこともあり、親欧州系の政党が一定の支持を得た一方で、欧州懐疑的な政党に対する支持は限定的な範囲にとどまっています。ただしロシアのウクライナ侵攻の長期化や欧州議会における右派・極右系政党の再編、あるいは 2024 年後半のハンガリーの EU 議長国就任などいくつかの不確定要素は存在していて、これらが今後の動向に影響を与える可能性はある、と本論は結論づけています。

EU 政治の専門家であるコメンテータは、EU 政治そのものの研究と各国の政治研究を架橋するものとして報告者の政治研究を高く評価し、この両者に等しく目配りしたコメントが

なされました。まずヴィシエグラード4カ国については、移民問題を抱える現状ではEU志向そのものがかつてのEU統合時とは変質しているのではないかと、また各国における国内政治とEUの舞台では主張の使い分けがなされている可能性がある、等の問いかけがなされました。欧州議会についても、性的多様性、移民・難民や環境の問題で一枚岩とは言えず、変質が目立つと指摘します。EU内では右派・極右系勢力の形成が新しい形で進行していて、その一例としてヴィシエグラード4カ国を再考するという刺激的な問題提起が行われました。

フロアからは、欧州議会選挙と国内選挙や外交、各国の報道の自由との関係を問う専門的な質問から、ヴィシエグラード4カ国という枠組みの有効性、ナショナリズムと反EUの微妙な関係についての議論、さらには右派・左派・ポピュリストという分類の根拠、人々の選挙行動を合理的なものとする事の妥当性等選挙分析の方法論を問う大きな議論まで、盛りだくさんの熱心なコメントが寄せられました。EUと各国の関係を帝国と周縁という枠組みから見直そうという議論が提起されたのもセンターらしいと言えるでしょう。[安達]

2024年11月14日 服部倫卓

報告：ダイヤモンド：制裁で交錯するグローバルとローカル

コメンテータ：大西富士夫（北海道大学）

このペーパーはArCS IIの成果論集に掲載予定のもので、ロシアおよびサハ共和国に貴重な収益をもたらしてきたダイヤモンド分野の経済制裁を題材に、G7による制裁の動向と、その効果と妥当性につき吟味するものです。ロシアによるウクライナ侵攻後、ダイヤモンドが対ロシア制裁の焦点の一つとなりましたが、本論は実際に大きな打撃を受ける可能性が高いサハ共和国の地域経済と社会にフォーカスすることで、グローバルとローカルの双方の視点から制裁に関して地に足のついた議論をすることを提唱しています。

コメンテータからは、制裁の効果と妥当性を客観的に問い直そうとする趣旨に賛意が寄せられました。そしてサハでダイヤモンド事業を担うアルロサ社の株譲渡をめぐる連邦とサハ共和国との間でのダイヤモンドの収益分配の歴史的背景が問われるとともに、連邦・サハ双方への制裁の影響について、データに基づいた緻密な議論が行われました。

フロアからは、制裁の解釈をめぐる、その効果は経済面よりもシンボリックな政治性にあらわれるのではないかと議論が提出されました。またダイヤモンドのグローバル・バリューチェーンに関する質問や、アルロサの実態やソ連的とされる企業体質を問うもの、戦争責任や税制をめぐる連邦とサハの関係を深掘りしようとする議論があり、さらには戦争への動員や戦死者数も多いサハにおける、経済効果では測れない地元の人々の暮らしや思いをどう掬い取るかといった表象＝代理の問題まで話題は広がりました。地政学的対立がクローズアップされる中で忘れられがちなグローバルとローカルの交点に注目し、かつてない試練に直面している人々の実態に迫ろうとするアプローチは、参加者の関心を強く刺激するものでした。[安達]

2024年12月2日 長縄宣博

報告：重なる紐帯、移ろう信頼：帝政末期アストラハンのムスリム社会の場合

コメンテータ：磯貝真澄（千葉大学）

このペーパーは東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のイスラーム信頼学の論

集に収録予定のもので、1905年革命後のヴォルガ・カスピ水系、とりわけアストラハンの多民族社会におけるムスリム社会で交錯する交流と対立を具体的に分析し、そこに垂直方向の統制と水平方向の流動性という二つの異なる信頼関係を指摘しています。新聞『進歩の証明』の分析から垣間見えるのは、先行研究で前提とされがちだった均質で明確な輪郭を持つムスリム社会とは異なり、都市生活を生き抜くために宗派も民族も越えて同じ境遇の者同士が協力する社会空間でした。

コメンテータはまず、インフラストラクチャーの近代化による人・モノの移動や情報伝達による帝政の基盤の掘り崩し、帝政下ムスリム社会におけるイスラームの相対化や宗教権威の揺さぶりに焦点を当てる2010年代以降のロシア帝国史研究の動向のなかに本論を位置づけました。そして歴史研究では利用されてこなかった「ヴォルガ・カスピ水系」という地域の枠組みを用いることで、ムスリム社会史における非常に有効な地域認識を提示するとともに、研究の不足していたアストラハンのムスリム社会の歴史に光を当てた点を高く評価しました。また本論で対比的に分析されている『進歩の証明』と『イデル』両紙の言語やそこに集う人びとについてコメントがあったほか、「ヴォルガ・カスピ水系」からイラン立憲革命へつながる反専制&立憲主義のムスリムの人的ネットワークの可能性について、また帝政末期のムスリムのうちとくに社会主義者に着目する意義について等、魅力的な問いかけがなされました。

フロアもこれに呼応し、「ヴォルガ・カスピ水系」「水平方向のネットワーク」への理論的・歴史的な問いかけから、新聞の言語や編集、季節労働者の移動、知識人と農民・労働者の関係等ムスリム社会の実態を問うものまで幅広く白熱した議論が行われました。社会史研究と思想史研究を組み合わせ、様々な社会経済的な関係性の中でムスリム個人がどのように主体性を発揮しているのかを探究するムスリム社会論の発展に大いに期待の持てる会となりました。[安達]

2024年12月3日 ガブランカペタノヴィッチ＝レジッチ・ヤスミナ

報告：Bosnian Muslim Politics Before the 1992–1995 War in Bosnia and Herzegovina: The Case of the Publication “The Muslim Voice”

コメンテータ：鈴木健太（神田外国語大学）

このペーパーは、1990年11・12月に行われたボスニア・ヘルツェゴビナ社会主義共和国の選挙に向けて民主進歩党（SDA）が発行した出版物『ムスリムの声』における視覚イメージとテキストの関係を、社会階級、民族、ジェンダー、宗教の観点から分析するものです。ユーゴスラビア社会主義連邦共和国が崩壊した後、続くボスニア・ヘルツェゴビナ戦争が勃発する前に行われたこの選挙では、SDAが勝利をおさめ、その後1992年にセルビア支配下のユーゴスラビアからのボスニア・ヘルツェゴビナの独立を求める住民投票の実施を積極的に支援するなど、1990年代末以降、ほとんどすべての政権に参加しました。『ムスリムの声』の分析からは、SDAには当時具体的な政策が欠けていた一方、セルビアのナショナリストを手本として、オスマン帝国の過去への非現実的な郷愁をかき立てていたことが明らかになるのです。

コメンテータは、この分析のとくに興味深い点として、当時の宗教的な緊張関係や不和、ボスニア・ヘルツェゴビナ戦争に至る直前の混沌とした状況、ナショナル／ナショナルス

ティックな価値観や志向が控え目に思える点を指摘しました。またこの号以外の『ムスリムの声』の出版状況や他の号との比較、『ムスリムの声』におけるナショナリズム、そしてこの出版物が90年の選挙でSDAの勝利に具体的にどのように貢献したのかについて質問が行われました。

フロアからは、視覚文化研究の射程について関心が示されたほか、歴史的知識を論文でどのように扱うかという大きな問題について議論が深まり、とくにユーゴスラヴィア・ムスリム組織（JMO）とのつながり、ジェンダーの視点、オスマン帝国の過去の表象とオスマン帝国へのノスタルジーとの比較、SDAへの批判と分析のバランス等の重要なトピックが取り上げられました。

議論に先立って報告者から当時の政治・社会・文化の状況について詳細な説明が丁寧に行われ、日本でもさらなる研究の深まりが待たれるこの地域・分野について知識と問題意識を共有することができました。[安達]

研究会活動

センターニュース 173号以降、センターが主催・共催した諸研究会活動は以下の通りです（国際シンポジウムを除く）。[編集部]

10月19日 シンポジウム 「ステレオタイプの魅力？：(ポスト) ソ連文化におけるドラマとメロドラマ」 中村唯史（京都大学）「ドヴージェンコ監督映画『大地』(1930)に見る〈社会主義リアリズム〉と〈反ドラマ性〉」、赤尾光春（国立民族学博物館）「国民的形成／教養のドラマとしての『国民の僕』？」、ロマン・カツマン（バル＝イラン大学／SRC）「ルネ・ジラールとエリック・ガンスの理論から見るメロドラマ：ロシア・イスラエル文学のケース」

10月22日 駐日ウクライナ特命全権大使講演会 コルスンスキー・セルギー（駐日ウクライナ特命全権大使）「未来のユーラシアのための協力：ウクライナと日本の対話」

10月22日 Special Seminar Rouben Azizian (Professor, Centre for Defence and Security Studies, Massey University, New Zealand) “Self-determination or territorial integrity? The impact of the Ukraine War on ethnic conflict in Post-Soviet Space”

10月30日 SRCセミナー Davor Jankuloski (The Research Center for Areal Linguistics "Božidar Vidoeski", Macedonian Academy of Sciences and Arts) “Periphrastic Verbal Constructions with Have + Past Passive Participle in Dialect and Standard Macedonian”

10月31日 北海道スラブ研究会 松本彩花（SRC）「カール・シュミット〈民主主義〉論その成立と評価：独裁・喝采概念を中心に」

11月1日 SRC セミナー（東京） Davor Jankuloski (The Research Center for Areal Linguistics, Macedonian Academy of Sciences and Arts) "Cultural Influences in the Macedonian Lexicon (Dialectal Perspective)"

11月5日 Survival Strategies Study Seminar Renat Bekkin (SRC) "The National Movement of Crimean Tatars and Dissidents in the USSR: Allies, Fellow Travelers, or Enemies?"

11月7日 Survival Strategies Study Seminar (Tokyo) Renat Bekkin (SRC) "Archival Investigative Files as a Source for Studying the Everyday Life of Muslims in the USSR in the 1920s–1930s"

11月12日 生存戦略研究セミナー 「ロシアの環境・脱炭素政策の新たな様相」 山脇大 (SRC) 「ロシア金融市場のグリーン化：中央銀行と暗号資産に焦点を当てて」、原田大輔（独立行政法人エネルギー・金属鉱物資源機構（JOGMEC））「ウクライナ侵攻で迷走するロシアの脱炭素政策」

11月18日 Survival Strategies Seminar (Harvard) David Wolff (SRC), Akihiro Iwashita (SRC), Norihiro Naganawa (SRC) "Eurasia from the East 2024"

11月21日 北海道スラブ研究会 ガブランカペタノヴィッチ = レジッチ ヤスミナ (SRC) 「ファーマ・コレクションとサラエボ包囲戦のバーチャル博物館（1992–1996）」

11月26日 北海道スラブ研究会 松本祐生子 (SRC) 「レニングラードの政治と戦争：1929～1957年」

12月1日 The First Periodic Meeting of the Commission on Slavic Micro Languages of the ICS Panel 1: Language Protection and Revitalization: Katharina Tyran "Burgenland Croatian in the Public Space: Grassroot Approaches to Expanding the Visibility of a Minority Language in Austria," Helena Duć-Fajfer "Рев і тал і зация проти асим і ляди і – можливе і неможливе"; Panel 2: Language Status and Standardization: Artur Czesak "Состояние и статус силезского языка в Польше," Tadeusz Lewaszkiwicz "Rola leksykografii w kodyfikacji języka kaszubskiego," Martin Henzelmann "Современная проблема стандартизации языка буневцев в Сербии"; Panel 3: SML in Non-Slavic Areas: Rossanna Venacchio "Семельфактивный суффикс -ни/ni- в словенских диалектах Фриули," Walter Breu "Аналитический каузатив молизско-славянского микроязыка как результат влияния итальянского," Motoki Nomachi "Existential Clauses in Kashubian: A Historical and Typological Analysis"; Panel 4: Topics from the Rusyn language and the Slavic-Slavic Language Contact: Aleksandar Mudri "The Dog in the Vojvodinian Ruthenian Linguistic Image of the World," Kaname Okano "Статус союза да и да - конструкции в процессе стандартизации русинского литературного микроязыка Сербии и Хорватии," Kenta Sugai "Does the Bulgarian Language of Parcani Have an Innovative Possessive Construction? An Analysis of the Contact-Induced Change"

12月4日 Survival Strategies Study Seminar Renat Bekkin (SRC) “How Islam was Governed in the USSR: The Institution of Muftiate and the Council for Religious Affairs”

12月6日 講演シリーズ「危機を生きるウクライナと世界」第6回 吉井昌彦(岡山商科大学)「ウクライナ・モルドバ EU 加盟の長く険しい道のり」

12月13日 生存戦略研究・オンラインセミナー “Guardians of the Truth” Almasa Salihović (Srebrenica Memorial Center), Azir Osmanović (Srebrenica Memorial Center)

12月13日 公開講演会 宇山智彦 (SRC) 「中央ユーラシアの『脱植民地化』：ロシア革命期からウクライナ戦争期まで」

12月26日 EES/CGR Special Seminar (Nagasaki) "Migration in Wartime" Vladimir Rouvinski (Icesi University, Colombia / SRC) “Driven by Uncertainty: Contemporary Russian Migration to Latin America”

1月9日 北海道中央ユーラシア研究会第148回例会 Mirlan Bektursunov(日本学術振興会) “Russian Empire, Soviet State, and Kyrgyz Nomads: Tracing Lineages Through State Archives”

1月10日 生存戦略研究・オンラインセミナー Aida Kalender (University of Amsterdam) “Power of Popular Culture During Wartime: Case of the project Rock Under Siege in Sarajevo 1994/95”

1月13日 ワークショップ 「かつての『新興国』のいまとこれから：ラテンアメリカと中・東欧の2020年代の現状から考える」 第1セッション「ラテンアメリカにおける政党政治の変容」馬場香織(北海道大学)「メキシコ新政権の発足と治安政策」、安良城桃子(東京大学大学院)・舂方周一郎(東京外国語大学)「2024年ブラジル地方選挙と政党政治のゆくえ」；第2セッション「ロシアのウクライナ侵攻前後の東欧の変容」服部倫卓(SRC)「ルカシェンコの30年を経てベラルーシはどこへ向かうか?」、中井遼(東京大学)「ロシアによるウクライナ侵攻後のバルト諸国の選挙政治」

1月21日 北海道中央ユーラシア研究会第148回例会 大野和馬(東京大学大学院修士課程)「ロシア統治下のタシュケントにおける公共屠畜場運営：異文化接触の場として」

1月23日 SRC 生存戦略研究セミナー Olga Veselovskaya and Ekaterina Sokolova (Eurasian Technological University, Kazakhstan) “Recent Russian Migration in the Caucasus and Central Asia: Challenges and Obstacles in the Host Societies”

1月24日 EES/UBRJ Special Seminar “War and Gender: Realities of the Russian Diaspora” Vladimir Rouvinski (Icesi University, Colombia / SRC) “The Escapees: The Complex Journeys of Russian Migrants in Latin America”; Olga Veselovskaya (Eurasian Technological University,

Kazakhstan) “Argentina: Information Asymmetry and the Shaping of Russian Migration Outflow”; Ekaterina Sokolova (Eurasian Technological University, Kazakhstan) “Women and Migration: Women's Role in Adaptation to Host Societies”

1月25日 東ユーラシア研究プロジェクト (EES) 2024年度全体集会 基調講演：岩下明裕 (SRC / 長崎大学) 「グローバルリスクとしてのユーラシア」；セッション1「EES北海道拠点パネル」松本祐生子 (SRC) 「戦争における越境とジェンダー」；セッション2「EES拠点間合同パネル」川口幸大 (東北大学) 「食から考える「マイノリティ」のウェルビーイング：ヨーロッパ・アフリカ・中南米における東アジア系移民のよき生をめぐって」、王柳蘭 (同志社大学) 「北タイ国境における差異と開かれた記憶に向けた葛藤：コモンプレイスの構築は可能か」、李定恩 (立命館大学) 「フィリピン人女性のジェンダー化した「移動」と労働：フィリピンの英語学校の英語講師の経験に着目して」

1月26日 東ユーラシア研究プロジェクト (EES) 2024年度若手研究者集会 小栗宏太 (東京外国語大学)、アントネンコ・ヴィクトリア (SRC) 「第二次世界大戦後サハリン州の境界変更と日ソ貿易」、内藤寛子 (アジア経済研究所) 「誰が『虎』を裁いたか？：汚職幹部の司法プロセスに注目して」、前田彩希 (神戸大学大学院博士後期課程／日本学術振興会) 「ジャワのスピリチュアリティにおける知識伝達の予備的考察：古い本出版から神秘主義的实践へ」

1月31日 Lunch Talk Vytautas Kuokštis (Vilnius University, Lithuania / SRC) “The Political Economy of Lithuania: A Path Full of Puzzles”

人事の動き

研究員・事務職員の異動

上村 正之 学術研究員 2024年10月1日 (採用)
横井 麻未 事務補助員 2024年10月21日 (採用)
坂口 夏海 事務補助員 2024年11月30日 (退職)
林 健太 研究支援推進員 2024年12月1日 (採用)

第4回 マトリョーシカ・インタビュー

宇山 智彦 教授

SRC の研究員に自身の研究や SRC への思いについて聞き出すインタビュー。マトリョーシカのように研究員の少し内側の姿に迫るコーナーを目指します。

第4回目は、「スラ研歴が最も長い」という冠を田畑名誉教授から譲られる形となった宇山智彦教授にお話しを伺いました。



世界情勢の変化とユーラシア地域研究への信頼

—先生はちょうどスラ研の「スラブ・ユーラシア研究センター」改称時(2014年)、つまり「ユーラシア」を冠するようになった際にセンター長を務められていました。これはスラブ・ユーラシア学の構築ということで、ポスト社会主義・旧ソ連圏という認識に代わる学問的な切り口としてスラブ・ユーラシア学の名付けをしたとも言えるような時期だったのではないかと思います。この地域がますます重大な世界的情勢の舞台として注目されている中で、当時からの研究を踏まえて、今の情勢につながることで予期していたことや、スラ研が果たしてきた意義としては何がありますか。

まず経緯から言うと、スラブ・ユーラシアという言葉を使い始めたのはもっと古くて。私が着任したのは1996年ですが、その前の年に、故・皆川修吾先生が代表者を務められた重点領域研究において、社会主義圏崩壊以降の旧ソ連東欧地域を総合的に研究するためにスラブ・ユーラシアという言葉を使っています。私の着任前のことですので詳細は知らないのですが、ソ連崩壊後それほど時間が経たない時にこの言葉を使い始めたというのは当時のスタッフの先見性だったのではないかなと思います。ですからスラブ・ユーラシアという言葉自体は、改称以前の20年間ぐらいは既に使っていたんですね。

それから、名前としても「スラブ研究センター」というとスラブ系諸民族が住んでいる地域の研究ということになってしまうので、実態と合わなかったんです。スラ研は90年代後半から中央ユーラシアをかなり重点的な地域として研究してきたので、この実態に合わせてようということをして私が提案して「スラブ・ユーラシア研究センター」にしました。それが2014年の4月だったのですが、実はこれはちょうど悩ましいタイミングで。その前の月、3月にロシアがクリミアを強制的に併合し、4月にはドンバスで紛争を扇動し始めました。その時の、ロシアの右翼的なイデオログたちというのがユーラシア主義者と名乗っていた人たちで、要はロシア中心のユーラシアという空間を広げていこうという考え方なんですね。だからスラブ・ユーラシア研究センターに変えましたと言うと、君たちはユーラシア主義者かと(笑)。

—狭義のユーラシア主義と捉えられたと(笑)。

ユーラシア主義も広がりのある言葉で、別に右翼の独占物ではないんですけども、やはり当時からロシア右翼・プーチン政権の拡張主義の用語として目立ってしまったので、外

国の人からちょっと誤解を呼ぶ面も少しあったわけですね。とはいえそれは説明すれば分かってもらえることです。

しかし、当時は今のロシアの拡張主義というのが大きな問題を起こし始めた時期でもありました。私はその頃からこれは世界秩序を乱すとても大きな問題だと思っていたんですが、日本はロシアとの関係を良くして北方領土問題を解決して平和条約を結ぼうという方向に動いていた時期だったので、当時はなかなかそういった理解が広がりませんでした。そういう警告がなかなか届かないまま、2022年のウクライナの本格侵攻に結びついてしまったというのは、とても無念なことだと思っています。このロシア・ウクライナ戦争の問題を話題にすると、すぐに親ロシアか親ウクライナかみたいな話になるのですが、やはり一番大きな問題は世界秩序を壊す動きであるということだし、そしてやはりロシア自身が、非常に変質してしまいました。ソ連という国を改革する動きの中から新しいロシアという国が生まれ、私はちょうどソ連の末期、1989年から90年にモスクワに留学したので、ソ連時代のロシアというのは本当に青春の場所です。特にロシア語を使う空間、中央アジアも含めてですが、そこでいろんな人と付き合ったということが私の人格形成にとってはとても重要だったので、多民族の共生する空間としてのロシアあるいはロシア語圏というのが非常に変質して、むしろ大国主義や排外主義のはびこる空間になってしまったということに私はとても心を痛めています。単に個人的な問題としてではなく、歴史研究や政治研究に携わってきた者としてこの問題に向き合わなければいけないということで、私の中心的な専門は中央アジア研究ですが、旧ソ連地域全体を見てきたので、できる範囲でいろいろ発言してきたつもりです。

—そうした衝突を前にして、ロシアの拡張主義が繰り広げられる空間という側面も旧ソ連地域固有に存在している多様な政治・文化の空間という側面も冷静に見つめてきて、当時から世界秩序に対する警鐘を發されていたということですね。そういった声が届きにくかった10年程前から、ロシアが戦争を仕掛けてきたという昨今に至るまでの間、むしろスラ研を取り巻く環境・世間の方が変わってきたと。そういった世間の気運の変化、たとえば10年程前の日露関係に対する楽観的な見方というのは何が作り出していたというふうに先生は見ていますか。

この辺りは岩下さんが専門なので私は脇から見ていただけですが、やはり日本の国内政治事情ですね。領土問題を解決して自分の功績にしようという人たちが楽観論に走り過ぎたというのが原因だと思いますね。ただ、ロシアがそんなに酷いことはしないだろうという感覚はロシア研究者を含めてかなり多くの人が持っていたことです。私は本格的な戦争が始まってすぐの頃にスラ研のウェブサイトに寄稿をして、なぜこういう事態にみんな驚いているのか、もちろん侵攻のタイミングは分からないにせよ、そういうことをしてもおかしくない政権だということがなぜ分からなかったのかということについて、心理学のバイアスという概念を使って書いたことがあります。そんなに酷いことはしないだろうというのは、正常性バイアスなんですね。

—スラ研ウェブページ「研究の最前線」でのロシアのウクライナ侵攻特集への寄稿ですね。ある種の楽観論から脱する一つの姿勢として、それこそ心理学などのメソッドを使って自分の視角をバイアスとして見つめなおすことで、なるべく客観的な立ち位置を目指すという、難しいけれどもそういったことも試みたということですね。地域研究者としては、まさに先生もおっしゃっていたよう

に、その地で青春を過ごしてという経験があったりしますよね。そうした国を研究対象とするときに、どうしても性悪説でその地域を見るというのはちょっと難しいんだろうなという気はします。

とても難しいですし、気を付けなければいけないことでもあります。ジャーナリストの方々からも言われるのですが、中東研究者はシリアのアサドを正当化し、ロシア研究者がプーチンを正当化していることがあるけれども、それでいいのかと。地域研究の信頼に関わる問いかけですね。地域研究者にとっては現地に行けるかどうかというのは確かに大きなことなので、その相手国の政府にいらまされたくないという部分があります。けれどもそれが研究者としての見解に影響を与えてしまうというのは、やはり信頼を傷つけることなので、そうではないあり方を考える必要があるのではないかと。私は中央アジアに関して、歴史や社会の良いところをなるべく発信してきたつもりですが、現在の政治体制について素晴らしいというようなことは決して書いてこなかったし、むしろ批判的なことをしばしば書いてきました。時々、世界の（特に西側の）報道で言われていることが偏っているのだから現地の言い分を伝えるのが地域研究者の仕事だという人たちもいますが、現地にもたくさん声があるわけです。現地の権力を持っている人やそれに何となく従っている人たちの声ばかりを伝えるとしたら、それもまた地域の声の扱い方としては偏っています。対象地域をバランスよく見るということや、その国全体あるいは世界全体にとってどういう影響を与えるのかを見極めるということには、善悪の判断もどうしても入ってきます。そこにきちんとした判断基準を持ちあわせているということが、地域研究者にとってはとても重要だと思っています。

一どんなに客観的な視角でしようとしても、最終的にはやはり善悪というところに依って、ということですね。スラ研全体としても研究を進めていく上で人権意識ですとかそういった善悪による判断を背景として諸々進めているということは感じていましたが、いま先生に言葉にしてもらおうとより重く響いたといいますか、とても印象的に思いました。

今まさに言われた人権ということがとても重要です。地域研究にとって重要なキーワードの一つは、文化相対主義です。何か絶対的な、特に西洋由来の価値基準で全てを決めてはいけないということですが、しかし、自分たちは西洋とは違うのだから、例えば政治的な異論をいう人たちを死刑にしてもいい、性的マイノリティーを迫害していいということを許す方向に相対主義が向かってはいけないと思うんですね。やはり普遍的な価値基準というのはちゃんと持っていないといけない。同時に、その基準に反する、自分たちから見て悪いものに思える研究対象についても、やはり客観性を維持しながら見ていく必要があって。例えばプーチン政権がやっていることが全て悪いことであるという話にはならないし、権威主義体制はいずれ滅びるものであるというような考え方に立つのもおかしい。私は権威主義とか大国主義というものを研究してきましたが、決してそういうものが全て反対運動を強めれば消え去るというような楽観論には立っていないくて、むしろ権威主義体制がそれなりにいろんな要素を取り入れて進化してきたという、ある面では強みも持っている体制なんだということも客観的に研究してきたつもりです。

これからのスラ研は研究インパクトと地域への貢献の両立を

—これまで地域研究者としても、そしてスラ研としても、ときに楽観論であったりした一時の世論の流れからは距離を置いて、地域をより客観的にしっかり見つめて発信してきたということですが、一方でスラ研も時代に合わせて今までとは違う部分を拡張していくようなこともあったと思います。最近のスラ研の新しいミッション、新たに価値を発信しているという取り組みでは、どういったものがあると先生は見ていますか。

スラ研はいろいろな研究者の集まりなので、決して一つの方向で動いているわけではないですね。重点領域研究や21世紀COEのときであれば、スラブ・ユーラシア研究の基盤をつくり全体を成長させていき、その後の新学術領域・地域大国の比較やグローバルCOE・境界研究であれば、新しい角度でスラブ・ユーラシア地域を見て、そして世界の他の地域の研究や世界のあちこちにある問題と結びつけて質的に新しい方向に持っていくということ、全体としてやっていました。その後はやはりそれぞれの専門分野の課題に合わせて取り組んでいるので、一つの方向に向かうというよりは、各研究員が重要だという方向をやっているのが現状です。一方で共通する重要な課題があるとすれば、それは研究を国際化させるということですね。スラ研は昔から国際シンポジウムをやり、外国で出版物を出し、外国の研究機関との連携を深めるといったことをやってきました。

今課題として残っていることが、私としては2つぐらいあると考えています。一つは、今は世界の学術研究成果の発表の仕方が昔とはかなり変わって、とにかくネット上で見られる論文じゃないとなかなか読んでもらえない時代になりました。各種のデータベースに収録されている媒体に書かないと数値として評価されなくなってきているので、もっと成果が可視化される形で論文を発表しないといけません。スラ研は、2000年代ぐらいから日本のスラブ・ユーラシア研究者の国際学会の参加を増やすという方向で旗を振ってきましたが、学会に参加するだけではなくて、広く読まれ引用されるような論文を外国語、特に英語で書いてその成果を伝えるという方向を強めていく必要がありますね。

それから、英語圏での活動だけやっていると現地とのつながりが薄くなっていく危険がありますが、地域研究者は研究対象国・地域とのつながりがあってこそその存在です。他の大学の地域研究者と話をしていると、地域研究の成果の評価の一つの柱として研究対象国・地域にどういう貢献をしているのかが重視されるべきだという意見を聞きますが、その面ではスラ研には向上の余地がまだまだあります。私はある程度それは努力をしてきたつもりで、中央アジア・コーカサスのいろんな立場の政治研究者や言論を担っている人たちと付き合うだとか、私の一番中心的な専門であるカザフスタンの歴史について、現地の研究とは違う視点で書き、なおかつ現地の人を読める形で成果を発表して、カザフスタンの人たちの歴史認識に影響を与えていくだとかですね。間もなく現地で出版されるカザフスタンの通史にも書かせてもらって、これまで拾えていなかったロシア革命直後のカザフスタンと日本の関わりについて言及することで、なるべく現地の文脈で意味のある研究にしようと思っているところです。

知を扱う者の責務を果たしつつ院生の多様な個性を伸ばしたい

—研究の話から少し変わりました、教育についてのお話しも伺いたと思います。先生はスラ研で留学生だったり社会人学生だったり幅のある個性を含む多様な学生をサポートされているかと思えます。そういったスラブ・ユーラシア地域の研究を志す研究者の卵のモチベーションに寄り添うときに、何か意識されていることはあるのでしょうか。

私は中央ユーラシアに関係する様々な分野の学生を担当してきましたし、スラ研に専門の教員がない分野、例えばロシア政治もそうですが、それを研究する学生も受け持っているのです、とても指導が難しいというのが正直なところ。全員を集めてやる授業ではなるべくそういった多様な人たちの役に立つことをやろうと思っているのですが、多様なニーズに応える授業をずっとやるということもなかなか難しいし、かなりたくさんの、しかもそれぞれ専門が違う学生を持っているので、一人一人にきめ細かい指導をするのがなかなか難しいです。しかしできるだけことをやるという方針でやってきました。大ざっぱな言い方で言うと、自分のスタイルを押し付けないということを考えてきました。自分の縮小コピーを作っても仕方ないですし、その人ができることをなるべく伸ばしたいですね。それから、私は研究上で重要なことの一つは、とにかく研究者は間違っただけを書き写してはいけないということだと思っているので、論文の中で間違いがあれば、それはどんどん指摘しますね。また、国際学会での発表や国際的な雑誌での論文執筆も推奨してきて、比較的最近の修了生ではミルランさんがそういう方向でとても活躍しているし、今の学生でも活躍しつつある人たちがいるので、とても頼もしく思っているところです。

私自身は、大学院生だったときに特段の指導を受けた経験がなくてですね（笑）。学部時代に教養学部教養学科というところにいたので、専門の蝸壺に入ってはいけない、学際的なことをやらなければいけない、ということをおさかんに教えられて、それをわりあい真に受けて、いろいろな分野にまたがることをやってきました。それからもう一つ、ロシアの歴史を学生時代に勉強をする中で、ナロードニキの思想に興味を持って。知識人というのは人民

に負債を負っている、特権的な教育を受けさせてもらったのだから、それを返すために人民に奉仕しなければいけないという考え方ですね。もちろん人民という何か一つのものがあるということ自体が知識人の想像であって、実際は一般の人々の中にも多様な考え方や利害を持った人たちがいるから、ナロードニキの「人民の中へ」という運動は失敗するんですけど、や



研究員・院生主催の誕生日祝い 中央アジア料理を囲んでの昼食会

はり知を扱うことを仕事とする人間は、社会に何らかの形で役に立つ必要があるとそのとき思いました。また、私の研究の中でも一番の中心的な対象はロシア帝国末期からソ連時代初めにかけてのカザフ知識人なんですね。その人たちはまさに政治指導もするし、社会運動もするし、文化活動もするし、学問もやるという人たちだったので。もちろんそれはその時代特有の背景があったことですから、自分がそれをやるものとは思わないですけども、やはり自分の専門に限らない社会的な意味のある発言をする、それから自分の研究を通して、例えば旧ソ連地域の見方を通して、今の世界にどう向き合ったらいいかということ発信するというようなことを責務として考えているところがあって。これはもちろん一つの考え方で、私は学生にそうしろと言わないですけども、いろいろところで発言しているのを見て、こういう研究者のあり方もあるんだなと思ってくれるといいなと思っています。

一必ずしもそれを体現しようとしているわけではないとおっしゃいましたが、ナロードニキヤカザフ知識人といった研究対象からの影響というのは、今日出てきた言葉でいうと「善」を備えようとする姿勢とも根底でつながっているんだろうなと伺っていて思いました。「大学院修了者の声」で垣間見る、指導学生が感じている宇山先生の真摯な研究への向き合い方というのは、こうしたところから発されているということがよくわかりました。ありがとうございました。

(取材：田宮 彩也香)

宇山 智彦（うやま ともひこ）

1967年生

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授

東京大学教養学部卒業

東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了

同博士課程中退

1994 - 1995年 在カザフスタン日本大使館専門調査員

1995 - 1996年 カザフスタン科学アカデミー東洋学研究所客員研究員

1996年 北海道大学スラブ研究センター 助教授

2006年 同教授

2010年 第25回大同生命地域研究奨励賞受賞

2012 - 2014年 北海道大学スラブ研究センター長

2020年 日本学術会議会員

2022年 カザフスタン共和国ドストゥク勲章受章

2024年 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 教授（クロスアポイントメント）



1968年の東京言語研究所におけるイビッチ夫妻の連続講義とその裏話

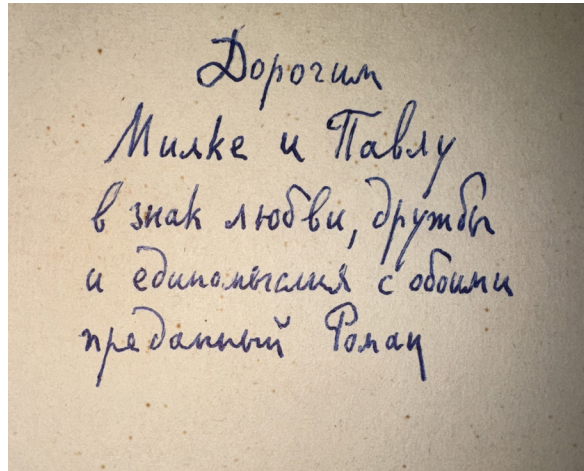
野町素己 (SRC)

2023年と2024年は旧ユーゴスラビアを代表する言語学者ミルカ・イビッチ（1923–2011）およびパブレ・イビッチ（1924–1999）夫妻の生誕百年にあたり、セルビアでは関係する研究集会がいくつも組織された。筆者はかつてミルカ・イビッチ先生の指導を求めて旧ユーゴスラビアに留学し、現地で先生と交流があったこともあり（詳細はセンターニュース126号pp.16–19）、そのイベントの一つはセンターと協定のあるセルビア学士院セルビア語研究所が共同で組織した。この春には、その研究集会での報告をもとにしたミルカ・イビッチ記念の研究論文集がセンターとセルビア語研究所で共同刊行された。この論集は論文8本+資料集と小規模であり、共同編集者のソフィヤ・ミロラドビッチ氏との間では「小論集」と呼んでいる。なお、筆者もミロラドビッチ氏もイビッチ夫妻を記念した論文集（こちらは「大論集」）でも編集員に名を連ねているが、こちらは大規模な招待を行ったこともあり、世界各地から100本近く投稿があった。既に査読も終わり著者から改訂稿が続々と届いているので、この論集も近く刊行されることと思われる。

さて、「小論集」における拙稿に関し、入稿のタイミングとの兼ね合いで十分に執筆できなかった箇所があった。拙論は今後改訂したり、新たに論文にしたり機会は恐らくないだろう。その一方で、論文から漏れた事実は、後々どなたかの参考になるかもしれないことであるため、刊行されたばかりの「小論集」の紹介も兼ねて、ここに書き残しておきたいと思う。筆者がセルビアに留学を決めた2002年秋に、セルビア学士院でミルカ・イビッチ先生にお目にかかる機会があった。その時に先生は1968年8月に東京言語研究所からの招へいで、集中講義を行ったことを回想された。この集中講義については、筆者も事前に聞いたことがあった。私の伯父である英語学者・小野茂（1930–2014）が、生前にイビッチ夫妻のことを話していて、突っ込んで聞けなかったが、どうも東京言語研究所のその集中講義に出席したようなのである。ミルカ・イビッチについて、伯父は「東欧から来た沢山の言葉ができる、すごい学者がいた」と言っていた。当時あまり知ることができないソ連や東欧の言語学に触れて衝撃を受けたことは伝わったが、今となっては伯父に詳細を聞けなかったことが悔やまれる。

イビッチ夫妻を招へいた東京言語研究所とは、1966年に設立された一般財団法人で、言語学の普及と発展、研究者の育成に貢献している組織である。その設立当初に「理論言語学セミナー」と銘打った1週間程度の集中講義を行うために、世界の傑出した言語学者を招聘していた。招へい講師は、夫婦で招待され、往復航空券はビジネスクラス、日本の一流ホテルに滞在、その後も観光旅行がセッティングされるなど、かなりの「おもてなし」であったようである。1966年には生成文法の理論で世界的名声を博していたノーム・チョムスキー、1967年にはロマン・ヤコブソン、そして1968年にイビッチ夫妻が招聘された。尤も、ヤコブソンが1966年に招へいされていたのだが、ヤコブソンの都合が合わないため、チョムスキーが代わりに招へいされたのが実情である。研究所は服部四郎氏（1908–1995）

が中心になって運営され、「理論言語学セミナー」の講師選考は、東京言語研究所名誉所長のヤコブソンと運営委員長の服部四郎が行っていたようである。私がミルカ・イビッチと会った時も、またその後のインタビューにおいても、「ヤコブソンが私を講師に推薦し、服部先生が東京に招待してくださった」と言っていたので、私もそうだと信じていた。その一方で、東京言語研究所の雑誌『ことばの宇宙』にある掲載されている研究所の講座の時間割とシラバスを見る限り、服部四郎はミルカ・イビッチの『言語学の流れ』（原著 1963 年、英訳 1965 年）を講義で使っていた。そして、ヤコブソンが推薦する以前からこの著者を高く評価していた。



ヤコブソンからイビッチ夫妻への献辞：「親愛なるミルカとパブレへ。愛情、友情そして二人と同じ意見の証として。忠実なロマン」と書かれている。「同じ意見の証」がヤコブソンにとって重要であった（筆者所蔵）。

ヤコブソンとミルカ・イビッチの交流は、1955年にベオグラードで知り合ったことに端を発する。当時、セルビア・クロアチア語の具格の通時的意味変化について博士論文を書いたばかりのイビッチは、ロシア語の格研究で1930年代に画期的な論考を上梓したヤコブソンの構造主義的アプローチに深い関心を持っていた。イビッチが構造言語学者として頭角を現していくのは、まさにヤコブソンの影響が大きく、ヤコブソンとの知己はイビッチにとって決定的な意味を持った。ヤコブソンはというと、自身に誠実で自説と考えを等しくする、実力ある言語学者には極めて温かく接する一方、自説を批判する学者には露骨に不快な態度をとっていたことは、ヘニング・アンダーソンやマイケル・シャピロといった、ヤコブソンの嘗ての教え子から何度か聞いたことがある。初期のミルカ・イビッチは、ヤコブソンの構造主義言語学に心酔し、ヤコブソンが中心となったプラハ言語学派の追随者であった。そしてヤコブソンの理論を応用して、セルビア語研究に新展開をもたらしたとも言える。1961年にミルカ・イビッチは、恐らくアレクサンダー・シェンカー（1924-2019）に招かれてイェール大学でスラブ言語学の講義をするが、その当時ヤコブソンへの手紙で、「私は何よりもあなたから学んだことを学生に教えるように努めている」とすら書いていた。このような調子で、ミルカ・イビッチはヤコブソンから随分と可愛がられたのは想像に難くない。

ヤコブソンとの関わりがあって、イビッチ夫妻が日本に招待されて集中講義を行ったことは、セルビアの言語学界では周知の事実であるが、その詳細は不明であった。日本語の文献が現地で紹介されることもないため、噂話のように伝わっていたという感じであろう。だから、筆者はイビッチ夫妻が日本でどのようなことをしていたのか教えてほしいとしばしば聞かれたが、私は詳細をほとんど何も知らなかった。このような文脈から「小論集」への投稿のため、既刊の媒体（特に日本語）から得られる情報に加え、ヤコブソンと服部四郎、ヤコブソンとイビッチ夫妻との交流を探るべく、マサチューセッツ工科大学図書館に保管されて

いる「ロマン・ヤコブソン・ペーパーズ」および島根県立大学の「服部四郎ウラル・アルタイ文庫」などで調査を行った。また当時の東京言語研究所やイビッチ夫妻の講義を知ると思われる複数の日本人の先生にもお話を聞いてみることにした。

アーカイブ関係の結論をまず言うと、マサチューセッツ工科大に保管されているヤコブソンの手紙類（ヤコブソン⇄服部四郎、イビッチ夫妻）から、ヤコブソンがイビッチ夫妻を服部四郎に推薦したような証拠は見られなかった。島根県立大学の資料は、まだ整理が終わっておらず、また「手紙は個人情報を含む」ということで公開されず、ミルカ・イビッチとの交流を示す資料にはたどり着かなかった。ただ、服部四郎が東京言語研究所の授業で使っていたと思われるミルカ・イビッチの著書『言語学の流れ』が保存されていたため、その本に服部四郎のメモが無いかと眺めてみたが、メモはごく僅かであり、服部四郎のイビッチ評を判断できるようなものはなかった。なお、イビッチ夫妻ご自身が持っていた資料は、ご息子がイビッチ夫妻のお住まいであったアパートを処分する際に全て廃棄したと聞いたので、こちらを探ることは絶望的であった。したがって、アーカイブ資料は本テーマで決定的な役割を果たさなかったが、ヤコブソンとイビッチ夫妻の密接な交流は手紙類から明らかになり、実際にヤコブソンはイビッチの研究サポートをしていたこともわかった。これは「小論集」の拙論と資料集を参照していただきたい。

東京言語研究所にイビッチ夫妻に関する当時の資料が残っていないかどうか、ということは、2008年に研究所に一度問い合わせをしたことがあるが、当時の資料はすべて廃棄してしまったという回答を受けた。なお、東京言語研究所は何回か移転し、それを機会に資料類は段階的に処分されたようである。したがって研究所から何か資料が出てくることは諦めるとしても、当時授業を聴講していた方々に印象を伺うことにした。1人目は服部先生に最も近かった、著名な日本語学・音声学の上野善道先生である。当時、上野先生は東京言語研究所で『言語学の流れ』を使った授業を受けておられた。上野先生はこの本がバランスよく書かれていることが印象に残り、また服部先生が批判的に本書を解説することで大変勉強になったと回想された。先生はイビッチ夫妻のセミナーにも参加されたが、当時はまだ学部生で、外国人の先駆的な講義の良し悪しなどを判断することはできなかったが、専門的観点から夫君のパブレ・イビッチにより関心を持たれたようであった。なお上野先生は当時の資料を探してくださったが、当時の授業ノートなどは既に廃棄されたとのことである。確かに、もう見るかわからないノート類を際限なく取っておくことは現実的ではないだろう。

次にお話を伺ったのは、アイヌ語研究の第一人者である村崎恭子先生である。村崎先生は、当時東京言語研究で研究員を務めておられ、上述の『ことばの宇宙』11号にミルカ・イビッチの講義ノートを掲載されていた。掲載のお名前は旧姓で「古川恭子」となっており、それが村崎先生であることを知るには少し時間がかかった。村崎先生から何らかの話をお伺いしたいと思ったが、メールアドレスをお持ちでは無いようで、お付き合いがありそうな北大アイヌ・先住民研究センターの丹菊先生にお伺いしたところ、村崎先生からすぐにお電話をいただくことができた。村崎先生は当時の授業の様子や、イビッチ先生の明るいお人柄などをお話くださった。また、資料もお探しくださるとのことだったが、こちらは保存されていないとの回答を後日いただいた。

その次にご連絡したのは池上嘉彦先生である。英語学、意味論、認知言語学などで大変な成果をあげておられる大家中の大家で、東京言語研究所で長く教鞭をとられている。1968

年には留学先の米国から帰国されていたものの、イビッチ夫妻の講義にはご出席ではないことが分かった。当時理論言語学セミナーに関わっておられたのは、鈴木孝夫先生と長谷川欣佑先生であるとのことだが、お二人とも幽明境を異にされている。私が2002年にミルカ・イビッチ先生にお目にかかった時、「鈴木孝夫先生は印象に残る優れた言語学者だ」と言われたのを思い出したが、時すでに遅しである。なお、池上先生は東京言語研究所の事務局にこの件で問い合わせくださるなどご尽力下さったが、この時のご報告では、講義の録音は、昔はとっていたようだが、現在は何も残されていないということであった。

最後にご連絡したのが、上述の『言語学の流れ』の日本語版の訳者である早田輝洋先生と井上史雄先生のお二人である。当時のイビッチ夫妻の講義にご出席されている可能性もあり、また同書の「あとがき」によると、翻訳の際にミルカ・イビッチ先生との文通があったようなので、当時のお話を伺えないか、また何か参考になるものが残っていないかということをお伺いした。早田先生の連絡先はわからなかったが、私の恩師の一人の米重文樹先生が、確か学生時代に東大の言語学科で早田先生とご一緒であったのを思い出したので、米重先生にお伺いしてみた。その後、米重先生経由で、早田先生はご体調がすぐれないため、メールであってもインタビューを受けられないというご回答があった。

ここまでくると諦めもつくのだが、井上先生への望みをかけてご連絡をすることにした。私は井上先生と面識がなかったので、直接先生をご存知の中島由美先生にご相談し、井上先生に繋いでいただいた。2024年の2月のことである。井上先生には、私の関心と背景を詳細にご説明申し上げ、私の原稿入稿が5月なので、できれば4月中に何かあればお願いしたいとお伝えすると、「暇を見て昔の資料を探してみる」という回答をくださった。そして4月11日に井上先生からお返事をいただき、まずはZoomで話したいとのことだった。結論から言うと、井上先生は当時の詳細な講義ノート、イビッチ夫妻の滞在日程表、また当時の写真などを保存しておられるとのことだった。井上先生からZoomでお話を伺い、そして5月末には資料類を全てお貸しくださるとのことになった。これらの資料と上述の「古川講義ノート」と照らし合わせることで、当時の講義の内容がさらに精密になり、また日本滞在中にどのような研究者との交流の実情も垣間見ることができたのである。私の体調は決して良くはなかったが、貸していただいた資料を貪るように読んだ。その時に気になったことの一つとして、ミルカ・イビッチが自身のベオグラード時代の師匠アレクサンダル・ペーリッチの統語理論（語結合理論）に言及していたかどうかである。というのは、この集中講義をまとめたものとして、ミルカ・イビッチは1972年に *General Syntax in Europe: Currently* という大論文を書いていて、そこでペーリッチの現代言語学での文脈における言及があり、またイビッチ先生ご自身が、日本人の間でも読まれた英語版の『言語学の流れ』（1965年）でもペーリッチの言語観を紹介されているからである。そして、ペーリッチは若手文法学派の学者と言われることがあるが、実際にはジュネーブ学派の言語学者シャルル・バイイ、さらには当時活躍していたチャールズ・フィルモアの有名な格文法に通じる観点があったからでもある。服部四郎もペーリッチに関心を持っているかもしれないことが、彼の書いたものの複数箇所から読みとれることも否定できない。しかし「古川講義ノート」にも「井上講義ノート」にもペーリッチへの言及はない。ただ、八杉貞利や井桁貞敏といった日本のスラブ・ロシア語学の黎明期においても、ペーリッチは既に言及されているのもまた事実である。講義の録音が無い以上、今となっては確かめようもないということで、拙稿では日本でペーリッ

子論がわずかでも展開された可能性については触れることにした。

なお、井上先生は、イビッチ夫妻の国立国語研究所訪問の写真も複数お貸し下さった。セルビアの読者に日本でのイビッチ夫妻の姿を見せることを思い、その写真に写っている人々を同定する必要があったが、井上先生にもわからない方が複数名いた。写真を上野先生にお送りしたところ、上野先生が何人もの他の先生



国立国語研究所関係者とイビッチ夫妻
(井上史雄先生ご提供)

に聞いてくださり、最終的には全員同定することができた。上野先生には音声学の手ほどきは受けたとはいえ、ほぼ見ず知らずの私のわがままを聞いてくださった両先生には感謝の言葉もない。私は今回のテーマで手を差し伸べてくださった全ての先生方や関係者に感謝しつつ、特にセルビア人にとっての「ミルカ・イビッチの知られざる日本滞在」を扱った言語学史、彼女のキャリアと研究交流から位置付けた論文を予定通り5月に入稿した。複数の査読を経て拙稿は掲載が確定したが、その後は、長く、また責任ある編集作業へ力を振り絞ることのみが念頭に置かれた。

2024年9月10日、上述の池上嘉彦先生からまさに青天の霹靂と言うべきメールを頂戴した。なんと、イビッチ夫妻他（チョムスキーやヤコブソンなども）の講演を録音したオープンリールテープが、東京言語研究所に大量に残っていたのが見つかったとのことだった。複数回「何も残っていない」と言われていただけに衝撃が走った。池上先生は、合わせてテープのリストもお送りくださった。リストを見る限り、全ての講演会だけではなくイビッチ夫妻が行った日本語のアクセント調査の録音もある。池上先生は私のことを東京言語研究所事務局に言及され、その後、東京言語研究所の事務局の方からご連絡をいただいた。ご相談の結果、まずはオープンリールの現物をお借りすることにした。自分では処理できないので、専門の業者を探し、オープンリールテープの電子化を受け付けているティアックカスタマーズソリューションズ株式会社に、まずはテープの状態を見ていただくところから始めた。テープの保存状態がとても良かったとのこと、同社は1か月程度かけ、大変丁寧な対応でテープを高音質で電子化してくださった。イビッチ夫妻の録音は、現地でもほとんど存在していないので、セルビア人にとっても大きな喜びとなるであろう。講義だけではなく、講義後の討論も興味深いものが多かった。電子化した資料は東京言語研究所にお渡ししたが、私個人の使用や公開、現地研究者への供与の許可をくださった。東京言語研究所からは、いずれ音源を公開されるとも聞いている。

音源が残っているとすると、運命的に確かめたくなるのが、上述のペーリッチ論である。村崎先生および井上先生の講義録は実に正確であり、ミルカ・イビッチの講義でペーリッチ

への言及はなかった。したがって、1972年のイビッチ論文でのペーリッチ論は、あとから付け加えられたものであることが確認された。既に論文集のゲラ作成が進んでいたため、もはや拙稿は訂正のしようもなかったが、思いもよらぬ形で事実が明るみになった。私が的を外してしまったのは否めないが、だからと言って残念な気持ちもあまり生まれえない。今回の研究成果は言語学史に劇的な発見や新展開をもたらしたわけではないものの、可能な限りの力を結集して、また想像し得ない幸運にも恵まれ、偉大な恩人の知られざる足跡を研究史に位置付け、忘却の危機から救い出したことを誇りに思っている。拙稿の学術的評価は、言語学史に取り組む研究者に委ねたいと考える。



東京言語研究所から貸与された
講義録音のテープ

皆川修吾先生を偲ぶ

宇山智彦 (SRC)

2024年がもうすぐ終わろうとしている時に、センターに悲報が飛び込みました。名誉教授の皆川修吾先生が12月18日に亡くなられたということです。

皆川先生は1939年のお生まれで、1961年に早稲田大学法学部を卒業後、ドイツ、オランダ、イギリスで学び、1975年にオーストラリア国立大学に博士論文 *Presidia and standing commissions of the federal and republican supreme Soviets in the USSR, 1958–1972* を提出して学位を取得されました。この博士論文をもとにした著書は、1985年に *Supreme Soviet Organs: Functions and Institutional Development of Federal and Republican Presidia and Standing Commissions* というタイトルで名古屋大学出版会から刊行されました。ソ連政治の研究といえば圧倒的にソ連共産党中央の研究が主であった時代に、ソ連最高会議および連邦構成共和国最高会議に注目し、これらが単なるお飾りではなく限定的ながらも政治的・社会的役割を果たし、ソ連政治の多様化を体现していることを指摘した皆川先生の研究は、21世紀の権威主義体制研究における議会への注目に通じるどころがあり、大変先駆的だったと言えます。

皆川先生は帰国後の1977年から南山大学で教鞭をとった後、1990年からスラブ研究センターに教授として在籍されました。1992年から94年にはセンター長を務められましたが、特筆すべき功績は、センター長時代の構想に基づいて、1995年から98年まで重点領域研究「スラブ・ユーラシアの変動：自存と共存の条件」を領域代表者として牽引されたことでした。9つの計画研究班と19件の公募研究から成り、多数の研究者を結集したこの重点領域研究は、74点の領域研究報告輯と6点の全体研究集会報告集を刊行し、その中には現地調査の成果や英語・ロシア語で刊行されたものも多く含まれていました。出版の電子化が始まったばかりの時期で、ほとんどの成果は紙媒体のみで刊行されたため、ごく限られた図書館でしか閲覧できないのは残念です。しかし、この重点領域研究がセンターおよび日本のスラブ・ユーラシア研究の発展に極めて大きく貢献したこと、また「スラブ・ユーラシア」という地域概念自体を創造し広めるという重要な役割を果たしたことは間違いありません。

皆川先生は重点領域研究の中でご自身が担当された計画研究班の成果として、1999年に編著書『移行期のロシア政治：政治改革の理念とその制度化過程』を刊行した後、2001年には定年より少し早く愛知淑徳大学に移られました。翌2002年には単著『ロシア連邦議会：制度化の検証1994–2001』を刊行し、研究成果をきちんと本にする姿勢を貫かれました。



センター設立60周年記念シンポジウム（2015年12月）のセッションで司会をしてくださった皆川先生

筆者は大学院生時代の1993年に鈴川基金奨励研究員として初めてセンターに来た時に、センター長だった皆川先生にお目にかかりました。外国生活の経験が長いだけあってダンディで朗らかな先生だというのが第一印象でした。1996年にセンターに着任した時には、2年目に入った重点領域研究の熱気と、先生のリーダーシップを目の当たりにすることができました。先生ご自身が企画する研究はロシア政治の枠内のものでしたが、他分野の研究者への包容力と優しさがありませんでした。そして、風通しのよい定期的な話し合いの場を設け、領域研究のスケジュールを明確に設定して、期間内に成果を出すよう無理なく、さりげなく大勢の人々を導く手腕は、本当に見事でした。

心より御冥福をお祈りいたします。

学界短信

日本学術会議北海道地区会議学術講演会 「北海道から多文化共生を考える」

2024年11月17日に標記の学術講演会（シンポジウム形式）が、北海道大学学術交流会館で、本学との共催により開催されました。多様な文化・言語・出自を持つあらゆる人々が、人権を守られながら共に生きる社会を作ること、世界的に重要な課題となっています。特に北海道は、アイヌという先住民の住む土地であると同時に、全国平均を上回る速さで少子高齢化が進む中で外国人の役割が増している地域です。この講演会は、文化人類学からコンピュータ科学に至る多様な学問分野の視点と、先住民研究や多文化医療に関する北海道大学の取り組みの成果を取り入れながら、多文化共生の諸問題を議論するために企画しました。

北海道の日本学術会議会員・連携会員には理系・医系の研究者が多く、学術講演会のテーマもどちらかといえば理系・医系寄りになることが多いのですが、今期（2023年10月～2026年9月）の北海道地区代表幹事をセンターの宇山が務めているということもあり、今回は社会・文化の問題に正面から向き合うテーマにすることができました。とはいえ、報告者の構成は理系・医系を含む多彩なものであり、あらゆる学問分野を包摂する日本学術会議ならではの企画となりました。

講演会は、日本学術会議の三枝信子副会長を迎えて、以下のようなプログラムで開かれました。

講演1 「マイノリティー女性と多文化共生」

石原 真衣（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

講演2 「北海道における外国人労働者の受け入れと共生の課題」

宮入 隆（北海学園大学）

講演3 「北海道における帰国子女・外国にルーツのある児童生徒の現状と未来への課題」
佐々木 ななみ (室蘭市立桜蘭中学校教諭)

講演4 「日本における医療アクセスの向上に向けた外国人患者との異文化コミュニケーションの促進」

フーマン・ゲードルズィ (北海道大学大学院医学研究院)

講演5 「コンピュータ科学で繋がる多様性社会：北海道から始まる新たな未来」
太田 香 (室蘭工業大学)

総合討論

進行：宇山 智彦 (日本学術会議第一部会員・北海道地区会議代表幹事、SRC)

コメント：大西 楠テア (日本学術会議連携会員、東京大学)

パネリスト：講演1から講演5の講演者

各講演は、特定技能制度の導入に伴う変化など最新の状況を踏まえ、現場での取り組みの経験や当事者の視点を交えながら、多文化共生の現状と課題を多面的に論じるものでした。全体として、広い面積に外国人や先住民が分散して住む北海道の特徴を念頭に置きながら、言語や意識の壁を乗り越えるための包括的な政策・施策を考える必要性が浮かび上がりました。本学の實金清博総長も最後まで出席し、鋭い質問をしてくれました。

本講演会には、219名(うちオンライン参加154名)の方にご参加いただきました。その中には多文化共生に関わる仕事をしている方々も多く、アンケートでは、「喫緊の課題について、多方面からの報告・議論を聞くことができ、大変に有意義であった」、「それぞれの分野での取り組む姿勢を感じられたこと、またその内容が具体的な事例で理解できたことはとても良かった」、「自分の進む道に示唆をいただきました」など好評でした。今回の講演会はスラブ・ユーラシア地域を対象とするものではありませんでしたが、センターでもこれまでに境界研究などの関係で多文化共生を論じたことはあり、今後さらに多文化共生関連の取り組みを増やすとよいのではないかと思います。

なお、2023年10月に本学で戦時下のウクライナ現地取材に基づく講演をした際にセンターを訪問して以来(センターニュー

ス170号参照)、センターの活動をフォローしてくださっているジャーナリストの岡野直さんが、この講演会についての詳しいレポートを、雑誌『北方ジャーナル』2025年1月号に書いてくださいました。関心のある方はぜひご覧ください。[宇山]

日本学術会議北海道地区会議学術講演会

北海道から多文化共生を考える

現在、多様な文化、言語、出身を持つあらゆる人々が、人種を問わずながら共に生きる社会を作ること、重要な課題となっています。北海道は、アメリイ先住民族の存在、全国平均を上回る遠くまで少子高齢化と高齢化に伴う外国人労働者の受け入れ、多様な外国人職生等の活動など、多文化共生に関して考えようとする機会が多い地域です。この講演会では、先住民、マイノリティと外国人に開かれた多文化社会を模索し、文化人類学からコンピュータ科学に至る多様な分野から、教育・医療・経済現場の視点から論じます。

プログラム

13時 開会
13時15分 開会挨拶(主催者代表挨拶、北海道学術会議代表挨拶、日本学術会議代表挨拶)
13時30分 講演1
13時45分 講演2
14時00分 講演3
14時15分 講演4
14時30分 講演5
14時45分 総合討論
15時00分 閉会

講演1 多文化共生と多文化共生
大西 楠テア(東京大学)

講演2 北海道における外国人労働者の受け入れと共生の課題
太田 香(室蘭工業大学)

講演3 北海道における帰国子女・外国にルーツのある児童生徒の現状と未来への課題
佐々木 ななみ(室蘭市立桜蘭中学校教諭)

講演4 日本における医療アクセスの向上に向けた外国人患者との異文化コミュニケーションの促進
フーマン・ゲードルズィ(北海道大学)

講演5 コンピュータ科学で繋がる多様性社会：北海道から始まる新たな未来
太田 香(室蘭工業大学)

総合討論
進行：宇山 智彦(日本学術会議第一部会員、北海道地区会議代表幹事、SRC)
コメント：大西 楠テア(日本学術会議連携会員、東京大学)
パネリスト：講演1から講演5の講演者

参加費 無料 どなたでも参加いただけます

申込
参加費無料(申し込みの際の11月15日締め) 定員は200名、オンライン参加枠は別途
申込受付は2024年11月15日(土)午後5時迄
申込方法は下記URLからQRコードをダウンロードし、お申し込みください
URL: <https://forms.gle/2g8uR8P8Y2j2C3A>

お問い合わせ先
日本学術会議北海道地区会議事務局
北海道庁 保健福祉部 国際交流課
〒060-0808 札幌市中央区南一条西五丁目1番1号
TEL: 011-706-2105・2166 FAX: 011-706-4873
e-mail: kyokai@hokkaido.ac.jp
(TEL/FAXは受付時間内のみ)

主催：日本学術会議北海道地区会議、北海道大学 後援：公益財団法人日本学術協力財団

学会カレンダー

2025年	3月15日	2024年度日本スラヴ学研究会研究発表会 於専修大学神田キャンパス https://sites.google.com/view/jsssl/home
	3月15-16日	2024年度日本中央アジア学会年次大会 於東京外国語大学 http://www.jacas.jp
	4月2-5日	ABS (Association for Borderlands Studies) 2025 Annual Conference 於シアトル https://absborderlands.org/meetings/abs-annual-conference/
	5月22-24日	ASN (Association for the Study of Nationalities) 29th Annual World Convention 於コロンビア大学 https://www.asnconvention.com/
	6月12-15日	ESCAS (European Society for Central Asian Studies) 2025 Regional Conference 於タシケント、サマルカンド http://www.escas.org/next-conference/2025-samarkand-conference/
	6月28-29日	日本比較政治学会第28回研究大会 オンライン https://www.jacpnet.org/convention/
	6月28-29日	比較経済体制学会第65回全国大会 於北星学園大学 https://www.jacesweb.com
	7月21-25日	ICCEES (International Council for Central and East European Studies) XI World Congress 於ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン https://www.iccees2025.org
	10月17-19日	日本国際政治学会2025年度研究大会 於神戸国際会議場 https://jair.or.jp
	10月23-24日	2025 ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Virtual Convention オンライン https://aseees.org/convention/2025-convention/
	11月8-9日	ロシア・東欧学会2025年度研究大会 於同志社大学 https://www.jarees.jp
	11月20-23日	2025 ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Annual Convention 於ワシントン DC https://aseees.org/convention/2025-convention/

[編集部]

図書室だより

ロシア・ソ連の映像文化関係の雑誌資料が充実

大平陽一氏(天理大学)からロシア・ソ連映画研究の重要な雑誌「*Киноведческие записки*」(映画学紀要)の大部の寄贈を受け、北海道大学附属図書館の所蔵が大幅に充実しました。欠けているのは1, 3, 7, 31, 46, 64号のみとなり、これで同志社大学、早稲田大学、大阪大学等と並ぶ国内最大級のコレクションになりました。全国の大学図書館を対象とする図書検索システムCiNiiによると、他大学所蔵のものと併せれば1, 3, 7号を除くほとんどの号を国内で見ることができます。雑誌のサイト(<http://www.kinozapiski.ru:8052/ru/archive/>)ではアーカイブのデジタル化が進んでいますが、現在のところ40号以前は未収録のようで、紙媒体が国内にあることは貴重です。大平先生のご厚意に心から御礼申し上げます。

またセンター図書室では英語圏のロシア・ソ連映像文化論をリードする雑誌*Studies in Russian and Soviet Cinema*の電子版の購読を開始しています。CiNiiには未登録ですが、北大では検索と利用(学内のみ)ができます。国内に紙媒体の蔵書がない(早稲田大学ではオンラインで利用可能)貴重な資料ですので、センターをご訪問の際はぜひご利用ください。

スラブ・ユーラシア地域の映像研究の重要性は近年ますます高まっており、センターではこの分野の発展に今後も力を入れて参ります。[安達・兎内]

井上紘一氏旧蔵書の受入

井上紘一名誉教授は、1940年生まれ。1975年から北大文学部附属北方文化研究施設で助手を勤められた後1983年に中部大学に転出なされました。その後、1994年にスラブ研究センター教授に就任され、2004年に停年退官・関西外国語大学に転出されるまでの10年間在籍し、多くの仕事をなされました。

井上先生は、民族学者として旧ソ連地域に限られない幅広い関心を持って仕事を進められ、大学の個人研究室の数部屋を満たすその膨大な蔵書は、テキストの言語だけをとりまいても日本語、ロシア語、英語、中国語、フィン語など多岐にわたるユニークなものです。

本センターでは、その旧蔵書のうち附属図書館とセンター図書室に所蔵のない資料を選んで受入することになり、図書約4000冊に加えて、ロシア領時代のフィンランドの雑誌“*Valvoja*”、ポーランドの民族学雑誌“*Lud*”の1950年代から90年代初めまでのバックナンバーなどを含んでいます。

これについて、2023年度から2024年度にかけて整理が進められ、センター図書室で利用可能となっておりますので、お知らせ申し上げます。[兎内]

ジョージ・シェヴェロフ旧蔵抜刷り類の整備

本センター図書室では、1997年から2006年にかけて、スラブ文献学・言語学者として活躍されましたジョージ・シェヴェロフ氏の旧蔵書を受入れ、センター図書室に配置してあることは、これまでお知らせした通りですが、それ以外に段ボール4箱分、主に抜き刷り等から成る未整理部分がありました。

これについて、本年度、著者名のアルファベットごとに区分して箱に入れる形で、整備を行いました。分量的には書棚5段を占めています。

目録をつくったわけではありませんので、何があるかは開けてみてわかることとなりますが、シェヴェロフの研究歴と交友関係、そしてウクライナ文芸史の一部を反映したユニークな資料群と思われます。センター図書室で利用できますので、関心のある方は、訪問の際お知らせ願います。[兔内]

一部欧文雑誌の購読形態変更について

欧文学術誌の価格上昇は、近年の円安もあって激しいものがあり、さらに大学の財政難が追い打ちをかける状況になっています。また、多くの欧文雑誌の媒体が電子版を主とするようになっています。そうした中で、昨年、フランス・テイラー・グループより価格体系変更についての連絡が入り、これまで少額の追加で冊子を併読できたものが、2025年からは多額の追加の支払いが必要ということになりました。

そのため、センターでは2025年以後、以下の14誌について冊子の購読を中止し、電子版のみ契約することになりましたので、お知らせ申し上げます。

電子版は北大OPACで検索できますが、CiNiiなどの総合目録では検索されません。また、ILLによる他機関からのコピー依頼についても、対応できないことが多いものと見込まれます。この点たいへんご不便をかけますが、よろしくご理解お願い申し上げます。

Canadian Slavonic Papers
 Central Asian Survey
 East European Politics
 Eurasian Geography and Economics
 Europe-Asia Studies
 Journal of Baltic Studies
 Revolutionary Russia
 Post-Soviet Affairs
 Post-Communist Economies
 Problems of Post-Communism
 Religion, State & Society
 Slavic and East European Information Resources
 Slavonica
 Southeast European and Black Sea Studies

編集室だより

SES36号『学士院会員ミルカ・イビッチ追懐・ その営為と学術的遺産』刊行

センターは2023年11月27日に共同研究のパートナーとして協定関係にあるセルビア学士院セルビア語研究所と同題目のワークショップを組織しました。本論集は、そのワークショップでの報告を大幅改訂した論文を纏めたものです。編集作業はセルビア語研究所のソフィヤ・ミロラドビッチ氏とセンターの野町が担当しました。

ミルカ・イビッチ（1923–2011）は、旧ユーゴスラビアを代表する言語学者で、セルビアの小都市ノヴィ・サドを、夫君パブレ・イビッチ（1924–1999）とともに構造言語学の一拠点として著名にした研究者です。また言語学史の専門家としても世界的に知られ、その著作の一つ『言語学の流れ』（原著1963年、邦訳1974年）は、数多くの言語に翻訳されました。本論集でも多くの研究者が同著作について言及しています。本論集ではミルカ・イビッチの回想や学術的意義再考に関わる論考に加え、これまで知られていない研究交流やそれを裏付ける貴重な学術資料も掲載されています。

本論集はセルビア語研究所の論集の新シリーズの第1号を飾るものですが、センターの共同刊行でもあり、SES36号も兼ねています。全文がセンターのウェブサイトで閲覧できます。

https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/coe21/publish/no36_ses/index.html

内容は以下の通りです。

第1章：学士院会員ミルカ・イビッチと外国人研究者たちの思い出

ウェイルズ・ブラウン……「ミルカ・イビッチの思い出」

野町素己……「ミルカ・イビッチと1968年の東京言語研究所」

第2章：セルビア語研究所とミルカ・イビッチの活動

ソフィヤ・ミロラドビッチ……「ミルカ・イビッチに寄せて」

スレト・タナシッチ……「研究誌 *Južnoslovenski filolog* 編集長としてのミルカ・イビッチ」

ラダ・ステイヨビッチ……「ミルカ・イビッチのセルビア語研究所刊『セルビア・クロアチア標準語・方言辞典』への貢献」

第3章：ミルカ・イビッチの学術的テーマと現代言語学における意味

ミリボイ・アラノビッチ……「単文の構造と意味に関わるミルカ・イビッチの見解」

岡野要……「ミルカ・イビッチの著作における名詞および動詞の諸問題」

アレクサンドラ・マルコビッチ……「ミルカ・イビッチの文法研究：セルビア語における前置詞および格システムと消去不可修飾語」

付録1……資料集

付録2……写真集

Acta Slavica Iaponica

アクタの新ラウンド(第47号)の原稿募集が始まりました。締め切りは2025年7月22日となっております。御投稿をお待ちしております。なお、今回から投稿規程を改訂し、スタイルシートを作成いたしました。投稿にあたっては、アクタのウェブページ上にてそちらを御参照いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

現在編集が最終段階に入っております第45号につきましては、なんとか今年度のうちに刊行することができそうです。5本の論文と1本の研究ノート、2本の書評を掲載できる予定です。今回も従来通り、多分野にわたる力強い論考が並びます。御期待下さい。[諫早]

『スラヴ研究』

『スラヴ研究』第72号については、8月末に投稿が締め切られました。研究ノート、論文、書評を併せて10件の投稿がありました。現在、2025年初夏の出版を目指して厳正な審査を行っております。たいへんご多忙中にもかかわらず、査読をお引き受けくださり、非常に丁寧なご講評をお書きいただいた先生方には、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。次号、第73号については2025年9月末日が締め切りとなっております。数多くのご投稿をお待ちしております。[青島]



会議

センター協議員会

2024年度第2回協議員会 12月9日(オンライン開催)

1. 教員人事について(准教授または講師)
2. 教員人事について(クロアボ)
3. 教員人事について(クロアボ新規)
4. 部局間交流協定の延長について

[事務係]

みせらねあ

専任研究員消息

岩下明裕研究員は、9/29-10/5の間、NATO Advance Research Workshop 出席・報告のため、ヨエンスー（フィンランド）に出張。また11/17-11/26の間、Eurasia From the East 2024 出席、セミナー出席、56th ASEEEES Annual Convention 出席のため、ケンブリッジ、ワシントン、ボストン（アメリカ）に出張。また12/8-12/11の間、資料収集、セミナーにおける報告のため、金門、台北（台湾）に出張。

野町素己研究員は、10/16-10/27の間、資料収集、聞き取り調査のため、ベオグラード、ノヴィサド（セルビア）、ソフィア（ブルガリア）に出張。

ウルフ・ディビット研究員は、11/15-12/3の間、Eurasia From the East 2024、56th ASEEEES Annual Convention 出席、資料収集のため、ケンブリッジ、ボストン（アメリカ）に出張。

長縄宣博研究員は、11/17-11/26の間、Eurasia From the East 2024 開催、研究打ち合わせ、56th ASEEEES Annual Convention 参加・報告のため、ケンブリッジ、ボストン（アメリカ）に出張。

服部倫卓研究員は、11/20-11/27の間、56th ASEEEES Annual Convention 出席、研究打ち合わせのため、ボストン、ニューヨーク（アメリカ）に出張。

青島陽子研究員は、12/2～12/8の間、研究打ち合わせのため、メルボルン（オーストラリア）に出張。

[事務係]

目 次

研究の最前線	1
冬期国際シンポジウム「スラブ世界における言語・ネイション・標準化：その類似と相違」開催／野町研究員がマケドニア学士院最上位賞「ブラジェ・コネスキ賞」を受賞／ハーヴァード大学での生存戦略研究セミナー Eurasia from the East 2024の開催／セルギー・コルスンスキー駐日ウクライナ特命全権大使による講演会を開催／「国際スラビスト委員会スラブ・マイクロ文章語研究部会定例会議」開催される／EES/CGR Special Seminar “Migration in Wartime”@長崎大学／「東ユーラシア研究」プロジェクト（EES-SRC）／メルボルン大学訪問／中央アジア国際研究所（ウズベキスタン）代表団の来訪／共同利用・共同研究拠点公募研究の国際化の一步を踏み出して／2024年度公開講座「シルクロード：交差する時間・空間・ディシプリン」開催される／アカデミックライティング講習の開催／2025年度外国人招へい教員（外国人研究員）の決定／専任研究員・助教セミナー／研究会活動	
人事の動き	23
研究員・事務職員の異動	
第4回 マトリョーシカ・インタビュー	24
宇山 智彦 教授	
1968年の東京言語研究所におけるイビッチ夫妻の連続講義とその裏話	30
by 野町 素己	
皆川修吾先生を偲ぶ	36
by 宇山 智彦	
学界短信	37
日本学術会議北海道地区会議学術講演会「北海道から多文化共生を考える」を開催／学会カレンダー	
図書室だより	40
ロシア・ソ連の映像文化関係の雑誌資料が充実／井上紘一氏旧蔵書の受入／ジョージ・シェヴェロフ旧蔵抜刷り類の整備／一部欧文雑誌の購読形態変更について	
編集室だより	42
<i>Acta Slavica Iaponica</i> / 『スラヴ研究』	
会議	43
センター協議員会	
みせらねあ	44
専任研究員消息	

2025年2月12日発行

編集	田宮彩也香、宇山智彦
発行者	長縄宣博
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-2388、706-3156 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
